お茶の水女子大学

保育マネジメント ブックレット vol.1

── 保育マネジメントの現状と展望 ──

編集

国立大学法人お茶の水女子大学保育マネジメント研究会

目　　次

発刊にあたって …… 2

Ⅰ　プロジェクト概要 …… 3

Ⅱ「保育マネジメント」に関する研究動向と展望 …… 5
はじめに …… 5
1　「保育マネジメント」という言葉の広がり …… 5
2　保育マネジメントと園運営・園経営 …… 7
3　カリキュラム・マネジメントと保育マネジメント …… 8
4　総　括 …… 8

Ⅲ　保育マネジメントの実際 …… 10
～保育マネジメント論特論ゲストスピーカーの語りから捉えられること～
1　はじめに …… 10
2　こどもむら理事長柿沼平太郎先生に聞く …… 11
3　こどもなーと代表和泉誠先生に聞く …… 28

Ⅳ　プロジェクト成果の記録（2021.4-2022.9） …… 48

Ⅴ　プロジェクトメンバー一覧 …… 53

発刊にあたって

お茶の水女子大学のキャンパスのなかでは、毎日のように小さい子どもたちが歩いています。小さい子どもたちが何かをみつけて、笑い合い、楽しそうに遊ぶ姿とともに、学生たちは勉学をしています。ビルが立ち並ぶ東京都文京区にある小さいキャンパスですが、たくさんの緑と雑草と落ち葉があって、子どもたちは都会の中の緑のあるキャンパスで生活をしています。このようにキャンパスの中に小さい子どもたちが歩いているのは、お茶の水女子大学に、附属幼稚園、いずみナーサリー、文京区立お茶の水女子大学こども園という3園があるからです。

本ブックレットは、そのようなお茶の水女子大学に寄附講座「保育マネジメント及び保育実践講座」が設置されたことからすすめられているプロジェクトの研究成果です。プロジェクトの詳細・構成については、次のページの「プロジェクトの概要」にゆずりたいと思いますが、株式会社ポピンズホールディングス様のご寄付によって、本プロジェクトが立ち上がり、そして、プロジェクトの要となる宮里暁美特任教授をお迎えすることができました。心から感謝申し上げたいと思います。

プロジェクトは、大学と園との共同研究によって進められています。共同研究を進める上で留意していることは、大学と附属幼稚園といずみナーサリーと文京区立お茶の水女子大学こども園の4つの組織が、すべて研究の担い手として、対等な研究パートナーであるという点です。この4者の間では、いろいろな組み合わせの可能性があって、それぞれが互いに研究のパートナーになってきました。そして何より、4者の中には、多様で異質な人々がいることに留意することが重要であると考えてきました。当然のことながら、教員だけでも保育者だけでもなく、なにより子どもたちがいて、学生・院生がいて、保護者がいます。そういった異質な人々がみな、それぞれ探究者・研究者であり、互いの研究のパートナーとなりうると考えています。

さらに、この関係はキャンパスをどんどん越境していく途上にあります。本ブックレットはお茶の水女子大学のキャンパスを超えたたくさんの研究パートナーとの対話からみえてくるものを考えた成果にほかなりません。このブックレットを手始めとして、研究の広がりをすすめ、それを深化させ、たくさんの研究のパートナーとともにプロジェクトを発展させていきたいと考えています。

2023年3月1日

小玉　亮子

Ⅰ　プロジェクト概要

松島　のり子

お茶の水女子大学は、1875（明治8）年の東京女子師範学校創設以来、女性のための高等教育機関としての使命を遂行し、女性教員の養成も担いながら歴史を歩み続けている。女子教育の先駆的存在として研究・教育を行い、こんにちでは、グローバル女性リーダーの育成に取り組んでいる。特徴の一つとして、こども園、ナーサリー、幼稚園、小学校、中学校、高等学校、大学、大学院が一つのキャンパスをともにしていることが挙げられる。なかでも、附属幼稚園は1876年に開園しており、以来、保育・幼児教育の実践、研究や、子ども学分野の研究、教育に取り組んできた歴史を有する。そして現在、乳幼児の保育・教育の質の向上、保育者の資質・能力の育成、地域子育て支援の開発支援に関する研究を、学内の乳幼児施設（附属幼稚園、いずみナーサリー、こども園）をはじめ、地域との連携も図りながら推進している。それとともに、乳幼児保育・教育のカリキュラムおよび社会人プログラムの開発、評価、発信を行っている。

2021年4月には、株式会社ポピンズホールディングスとともに、「保育マネジメント及び保育実践講座」（寄附講座）を設置した。同社は、「働く女性を最高水準のエデュケアと介護サービスで支援する」ことを企業理念とし、子育て支援サービスや乳幼児教育支援サービス、介護支援サービスなどの事業を行っている。寄附講座は、お茶の水女子大学とポピンズホールディングスの強みや特長を活かし、「未来を創る子ども達のために、乳幼児教育のエキスパートの育成」および、保育に必要な高度な知識を現職の保育者が学べる機会を充実させることを目的として設置された*。すなわち、お茶の水女子大学がこれまで蓄積してきた研究・教育活動に基づきながら、「保育マネジメント」や「保育実践」に関するカリキュラムを通じて、現職の保育者をはじめとする保育関係者が、保育の向上に必要となる高度な資質・能力を養うために学べる機会を創出してく。それにより、乳幼児の保育・教育に関してさらに高度な専門性を身につけた熟練者を育てていくことをめざしている。

そして、この寄附講座とも連動しながら、乳幼児施設における保育・教育活動を組織的かつ計画的に改善するための「保育マネジメント」のあり方について追究していく研究会（保育マネジメント研究会）を組織し、プロジェクトを推進する。その際、保育・教育現場におけるさまざまな実践者と協働し、また、主として大学院（人間文化創成科学研究科人間発達科学専攻保育・児童学コース）における講座の展開を通じて、理論的・実践的に検討し、研究に取り組んでいる。

プロジェクトを進めるにあたり、キーワードとなるのは、「カリキュラム・マネジメント」と「グランド・デザイン」である。第一のキーワード「カリキュラム・マネジメント」は、2017年改訂の幼稚園教育要領や幼保連携型認定こども園教育・保育要領において新たに強調された概念である。子どもの姿や地域の状況にあわせたカリキュラムを編成し、組織的かつ計画的に保育・教育を実践し、それらを評価・改善することで、園の質の向上を図ることが重視された。第二のキーワード「グランド・デザイン」は、中長期的な視点からカリキュラムの編成と実施、評価と改善を可能にする、人的・物的体制づくりを実現するための設計図にあたる。

本プロジェクトでは、乳幼児の保育・教育において、従来分けて考えられがちであったカリキュラムと園運営とを包括的に実現しようとする「保育マネジメント」のあり方を、お茶の水女子大学附属の乳幼児施設等と協働して検討し、一つの構造モデルを提示し発信することをめざしている。

---

* 「【お茶の水女子大学×株式会社ポピンズ】寄附講座「保育マネジメント及び保育実践講座」設置に関する覚書の締結のお知らせ」2021.3.31（https://www.ocha.ac.jp/news/20210331.html 2022.12.21最終閲覧）。

プロジェクトの構想図

保育マネジメント
お茶の水女子大学
発
保育マネジメント研究会
評　価
記　録
暮らし
（デザイン）
経　営
園や保育の質の向上を図る
カリキュラム・
マネジメント
子どもの生活をていねいに考える
グランド・デザイン
乳幼児施設
附属
幼稚園
いずみ
ナーサリー
こども園
大学院
人間文化創成科学研究科
人間発達科学専攻
保育・児童学コース
人間発達
教育科学研究所
保育・教育実践
研究部門
お茶の水女子大学で日々積み重ね蓄積してきている
保育の実践・研究

Ⅱ　「保育マネジメント」に関する研究の動向と展望

辻谷　真知子

はじめに

本章では、本研究会が検討する「保育マネジメント」に関連する先行研究と近年の動向について概観する。「マネジメント」をはじめ、関連する「運営」「経営」や「リーダーシップ」も視野に入れて検討することを通して、本研究会の位置付けを明確にし、今後の展望について述べる。

1　「保育マネジメント」という言葉の広がり

近年、保育学の分野において「マネジメント」の言葉が多く用いられるようになっている。2022年の日本保育学会第75回大会の口頭・ポスター発表枠では「保育マネジメントなど」が設けられた他、「保育マネジメント」をテーマとした研究論文も増加している。国内のデータベースCiNii Researchの検索結果では、「保育」「マネジメント」両方の言葉を含む、あるいは「保育マネジメント」「園マネジメント」「教育マネジメント」の言葉を含む論文（「リスクマネジメント」など従来の複合語を除く）が2014年から2022年現在までに24件見られた。

複数の園の実践事例に基づき「保育マネジメント」の試行錯誤のプロセスや重要な点について執筆した井上・田澤・田島（2021）によれば、「『保育現場をマネジメント』『保育実践をマネジメント』の二つの意味と、さらに『保育とマネジメント』という意味も持たせた造語」とされている。一方でこの「保育マネジメント」の言葉自体は1992年に、胎児期に生じる障害である二分脊椎症の子どもの保育について書いた佐賀江（1992）でも使用されている（正確には「保育マネージメント」）。この中で次のように述べている。

> 保育場面では病児として対応するのではなく、保育が実践されなければならないことは当然である。本児はあくまでも保育所へ友達と楽しく遊びに行くのである。最も好ましい保育のあり方は遊びに没頭し続けてはいるが、実はその遊びは本児の望ましい状態（姿勢、肢位）を作り出すような遊びの流れをマネージメントしなければならない。

本論文で「保育マネジメント」についてどのような定義づけがなされているのかは明らかではないが、保育をどのように営んでいくのかという問題意識のもとで使用されたと考えられるだろう。

「保育マネジメント」の言葉は上記の後しばらく見られないが、保育の分野で「マネジメント」の言葉が用いられる文献は特に2010年代後半から増加しているようである。なお、「カリキュラム・マネジメント」「リスク・マネジメント」等については後述する。2018年の保育所保育指針改定に伴い、キャリアアップ研修において「マネジメント」が導入された（参考：秋田・那須, 2018）が、その背景として吉田（2019）

は「従来、保育研究においては、保育所における管理職の役割、リーダーシップについての議論は少なかった。それゆえに、保育者の専門性としての組織マネジメント能力については、養成段階においても、現職に就いてからの研修の段階においても取り上げられることが少なく、いわば等閑に付されてきた。そのような現状を改善するために、キャリアアップ研修において「マネジメント」が導入された」と述べる。すなわち、保育でのマネジメントは保育・幼児教育施設における管理職・ミドルリーダー等の役割や能力として重視されるようになってきていると考えられる。

このような「マネジメント」の定義については複数の研究で述べられているが、吉田（2019）では経営（management）として「事業目的を達成するために、継続的・計画的に意思決定を行って実行に移し、事業を管理・遂行すること」としている。また矢藤（2017）では「『維持・統制する』という意味にとどまらず、『評価・分析・選択・改善・計画・調整・発展・組織化……』など、さまざまな実際の運営上の要素を含んだ言葉」とした上で、「組織の成果を上げていくために実際に資源をどのように生かしていくかという営み」を「マネジメント」と呼んで検討している。

ところで、保育分野でも他の分野でも、「マネジメント」と並んでよく使われる言葉の一つに「リーダーシップ」がある。この2つの使い分けや重なりについても諸説あるが、保育分野での「リーダーシップ」に関して先行研究をレビューしている秋田他（2016）では、Smith&Langston（1999）から「マネジャーは統制し、管理運営し、全体を見渡し、調整する存在であり、自制によって動くものであるのに対し、リーダーはインスパイア（鼓舞）し、思考し、動機づけ、変化を開始し、ヴィジョンを持ち、要求し（dictate）、判断し、目標を設定し、ペースをつくり、忠誠を引き出す存在であり、自己充足的である。そして、両者は相互補完的である」と引用している。このSmith&Langston（1999）は保育でのマネジメントについて、章ごとに何らかの課題を抱えた事例を示しており、読者が振り返ることのできるワーク形式となっている。その中で「変化において、リーダーは人々の間により影響を与え、貢献を強める。マネジャーは立場に応じて責任を果たし、権力を行使する」（訳：著者）とも述べている。またBloom（1997）では「ビジネスの世界ではリーダーシップとマネジメントが明確に区別されることが多いが、保育では、よりフラットな関係性であり、園長は両方をもつ。コインの表裏の関係である。ヴィジョン、インスピレーションを提供するリーダーとして、また、ポリシーや手順が満たされる方法を組織するマネジャーとして」（訳：著者）と述べられている。さらに保育マネジメントの議論では、リーダーシップをマネジメントの枠組みの中の一つのアプローチとする捉え方もある（井上，パーソナルコミュニケーション，6月14日，2022）。これらを踏まえると、リーダーシップとマネジメントについては明確に使い分ける考え方もあるものの、保育においては園長や理事長といった管理職、あるいは副園長や主任などの立場が、両方の役割や能力を持ちながら保育の場を営んでいると捉えることができるだろう。

以上のように「保育マネジメント」あるいは「保育における“マネジメント”」は、近年のキャリアアップ研修への導入も相まって保育分野で着目度の高いテーマであるが、その定義や中身が共通認識として定まっているとはいえない。次節では、より古くから扱われてきた「運営」「経営」をキーワードに改めて「マネジメント」を検討する。

2　保育マネジメントと園運営・園経営

ここまでは「マネジメント」をキーワードとしてこれまでの動向を概観した。しかしこの用語は英語のmanagementに由来する。当然ながら日本の保育の歴史はこの「マネジメント」が注目されるよりも古く、当時から「マネジメント」に該当する仕事が保育の場を支えてきたはずである。そこで、最後に類似した意味の日本語である「運営」「経営」の言葉にも着目し、本研究会の「マネジメント」の位置付けを改めて考えたい。

近年では企業等の運営・経営のノウハウが可視化されてきていることや、それらの営利団体の保育業界への参入の影響もあり、園の設立やビジネスとしての拡張に重点を置いた書籍も見られる（中村，2021; 河村，2021など）。また少子化に伴い保育事業の「生き残り戦略」に着目した古谷（2021）では、複数の中核都市圏に支社を持ち保育所を全国展開する「大規模展開の企業」とそうではない「小規模展開の企業」に分けて、その戦略を示している。その中では、企業経営が「利益優先と誤解されている」とする経営者の語りも引用されている。園を設立・経営し展開することに関する文献では、保育内容や子どもの生活の流れのような、「カリキュラム・マネジメント」等で重視される内容が表に出てきにくい現状がある。ただし同時に、効果的な園運営・園経営と、業務効率化を含めた働き方改革（社会福祉法人日本保育協会・佐藤，2021）や保育者の研修、保育の質の向上、そして子どもの生活はつながっており、その点を想定しながら議論する必要があるだろう。

上記でも用いたCiNiiの検索で「園運営」「園経営」を含む文献は2021年までで58件あり、1960年代に遡る。さらに前では1950年に「保育所運営要領」が厚生省児童局から出されている。これは保育所の使命とともに、日々の保育の流れや必要な備品・経費、職員の役割等について多様な情報を示したものである。また「園運営」「園経営」についての文献では、法人としての経営や経費に関する内容だけでなく、「クラス経営」（高杉・森上，1980）「クラス運営」（渡辺・山田，1989）など保育実践に関する内容も含まれているようである。そして、これらのキーワードでの文献は2010年代以降に急増している（35件）。その中で矢田（1989）は、私立幼稚園における園児数減少に触れ、「これまで殆ど経営者個人の経験や勘に頼ってきた幼稚園経営に対して、かつてない園の経営革新を迫って」いるとし、「幼稚園経営者育成プログラムの具体化」の必要性にも言及している。このような私立幼稚園については近年でも秋田他（2021）が園長への調査から、若手の園長と中堅の園長とリーダーシップへの意識が異なり前者は教職員のコミュニケーションや保育に直接関わる傾向があることを示している。そして、継承にもタイプがあると同時に、大事にされていることは主に「教育理念」「教職員との信頼関係」「保護者との信頼関係」であることが明らかにされている。また若月（2020）は「保育者の資質向上」と「人材不足」を園運営の2大課題としてあげており、実際の研修の進め方や保育者が学ぶ機会の重要性にも触れて、管理職の視点からのアプローチについて述べている。

このように、古くからなされてきた保育の「マネジメント」として「園運営」「園経営」のキーワードに着目すると、ここまでは主に私立についてであるが、園の種別や設立主体、管理職の着任背景等により様々な視点があることが想定される。また公立園においては管理職の意識する内容が異なってくるであろうが、園で子ども、保育者、そして保護者や地域住民がどのように生活を営んでいくのかということは全て「マネジメント」につながっていると考えられる。次節では、「保育マネジメント」に先立ち多く検討

されるようになっていた「カリキュラム・マネジメント」を中心に整理することで、本研究の立ち位置を明確にしていく。

3 カリキュラム・マネジメントと保育マネジメント

保育分野で「マネジメント」が注目され始めたのは前述の通りここ数年のことであるが、「○○マネジメント」特に「リスク・マネジメント」および「カリキュラム・マネジメント」についてはより以前からも研究が多い。CiNii Researchの検索結果では、タイトルに「保育」「リスク・マネジメント」を含むものが2003年から2022年現在までで85件（うち53件は月刊誌「保育の友」の連載）ヒットする。保育現場での深刻な事故の発生および東日本大震災をはじめとした大きな災害などがその背景にあるだろう。また「保育」「カリキュラム・マネジメント」では大庭（2012）をはじめとして30件ヒットし、うち幼稚園教育要領改定の2017年以降のものが20件である。

このカリキュラム・マネジメントは「社会に開かれた教育課程」の実現（2016年中央教育審議会答申）の方策として示されたものであり、本研究会でも学内の認定こども園をフィールドとした研究「認定こども園教育・保育カリキュラムの開発:地域・社会に開かれた教育課程の視点から」を2018～2021年に実施した（科学研究費基金（基盤研究C)、研究代表者：宮里暁美、研究分担者：刑部育子・内海緒香・山﨑寛恵)。

カリキュラム・マネジメントでは主に、乳幼児期全体を見通しての子どもの経験と、それらを通した育ちを支えるため、園としてどのように教育課程を考えていくのかということが検討されている。それらの取り組みには、実際の子どもの生活が中心にある一方、園の職員構成や職員研修、設備・備品や経費に関することなど、「運営」「経営」の視点によってもその多くを支えられている。そのため「保育マネジメント」を考えるにあたっては、子どもの生活をいかに営んでいくのかということを中心に置きつつも、それを支える園運営や経営、すなわちマネジメントの視点について多様な観点から明らかにしていく必要があるだろう。近年の動向を踏まえつつ、様々な保育現場での実践・研究を生かした取り組みが重要と考えられる。

4 総 括

以上のように、「保育マネジメント」の用語自体は以前から使用されており、ここ数年で関心が高まっているテーマである。その一方で定義や内容は必ずしも共通認識があるわけではない。また企業のノウハウを活かすという現代的な視点がある一方で、「運営」「経営」というキーワードでは古くから園の役割を果たす中で重視されてきたことが明らかになった。そして、保育マネジメントが着目される数年前から重視されるようになった「カリキュラム・マネジメント」においても、生活の営みを中心に置きつつ、それを支える運営・経営の視点を持つことが重要であると考えられる。

本研究会は、学内の3種類の保育施設における実践・研究を生かし、特に現代の家庭背景による多様な生活が反映される認定こども園での教育標準時間外の生活、また生活全てに通じる環境設定や食の経験な

どに着目しながら研究を実施してきた。その中で園での子どもの暮らしや様々な人の参加、関わる人々の主体性を大切にするとともに、園内で完結するものではなく保護者や地域への広がりも重要な要素であった。本書を第1巻とする『保育マネジメントブックレット』においては、これまでの実践・研究を基盤としながらも、学外の多様な現場からも学びを得て、マネジメントにおいて大切なことを明らかにしていきたい。まずは、それを探る営みの一つとして園の経営者の語りを聞き、考えたことについて述べていく。

引用・参考文献

秋田喜代美・馬場耕一郎（2018）『保育士等キャリアアップテキスト7 マネジメント』.

秋田喜代美・芦田宏・小田豊・門田理世・鈴木正敏・中坪史典・箕輪潤子・淀川裕美・森暢子（2021）つなぐ・つなげる・つながりあうリーダーシップ－私立幼稚園 園長の園運営に関する調査報告－. つながる園内研シリーズ3（報告書）

秋田喜代美・淀川裕美・佐川早季子・鈴木正敏（2016）保育におけるリーダーシップ研究の展望.『東京大学大学院教育学研究科紀要』56, 283-306.

Bloom, P. J.（1997）Commentary. In Kagan, S.L. & Bowman, B.T.（Eds.）*Leadership in early care and education*. National Association for the Education of Young Children.

古谷淳（2021）保育所運営企業の「生き残り戦略」に関する実証的研究.『日本社会福祉マネジメント学会誌』1, 29-42.

井上眞理子・田澤里喜・田島大輔（2021）『トライアル・アンド・エラーに学ぶ　質の向上を目指す保育マネジメント』. 中央法規出版.

河村憲良（2021）『安定収益と社会貢献を両立する小規模保育園経営』. 幻冬舎.

厚生省兒童局（1950）『保育所運營要領』.

中村敏也（2021）『保育・療育で地域オンリー1になる　保育園運営の教科書』. かざひの文庫.

大庭三枝（2012）保育者における総合的な身体表現指導力養成を目指した教育方法の開発：異学年合同授業と学外実践を活用した指導計画とカリキュラムマネジメント.『福山市立女子短期大学紀要』39, 61-66.

小沢恒三郎・西久保礼造・比留間一成（編著）（1978）『保育舎の課題と実践シリーズ3 保育を経営・管理する園長・主任時代』. 教育出版.

佐賀枝夏文（1992）二分脊椎症児と保育マネージメント. 大谷学報71, 1-15.

社会福祉法人日本保育協会（監修）佐藤和順（編著）（2021）『保育者の働き方改革　働きやすい職場づくりの実践事例集』. 中央法規出版.

Smith, A. & Langston, A.（1999）*Managing Staff in Early Years Settings*. Routledge.

高杉自子・森上史朗（1980）『園経営とクラス経営』. 明治図書出版.

矢田貞行（1989）幼稚園経営に関する基礎的考察：私立『幼稚園経営学』論考.日本保育学会大会研究論文集42, 214-215.

矢藤誠慈郎（2017）『保育の質を高めるチームづくり　園と保育者の成長を支える』. わかば社.

吉田直哉（2019）保育者を目指す学生のための教育マネジメント論 ―「教育経営」講義ノート（3）―. 敬心・研究ジャーナル3, 67-75.

若月芳浩（2020）保育者の資質向上を支える園の体制づくり 園運営の課題を克服して保育の質を高めていく これからの園マネジメント.『これからの幼児教育』2020春, 17-21. ベネッセコーポレーション.

渡辺真一・山田誠一（1989）『ザ・職員会議大百科：園経営・クラス経営の決定版』. 世界文化社.

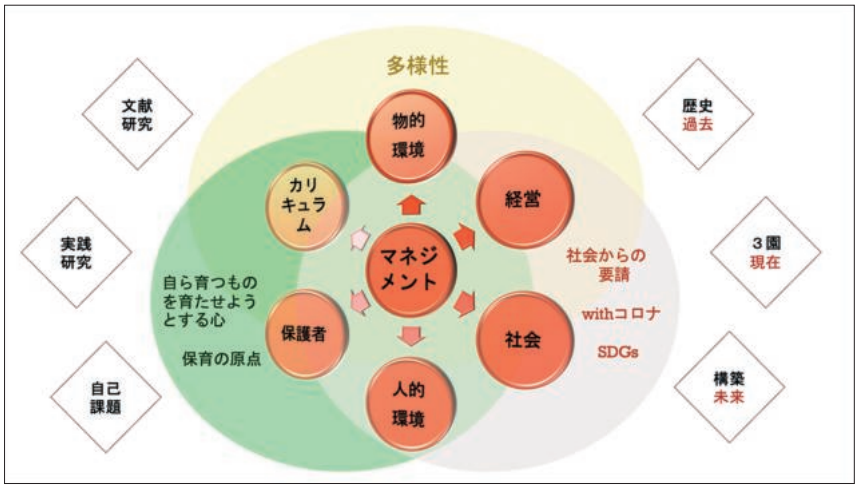
Ⅲ　保育マネジメントの実際

～保育マネジメント論特論ゲストスピーカーの語りから捉えられること～

宮里　暁美

1　はじめに

保育の質を組織的に高めるためにはリーダーが組織をマネジメントする必要があります。マネジメントの意識をもち職員一人一人の良さを引き出す園運営を実現するリーダーの下で、よりよい保育実践が実現すると考えます。2021年4月より、新しく開講した「保育マネジメント論特論」「保育マネジメント論演習」「保育実践リーダーシップ論特論」「保育実践リーダーシップ論演習」の講座では、豊かな保育の実現につながる「保育マネジメント」「保育実践リーダーシップ」とは、どのようなものか、という問いに向き合うために下図のように授業を構想しました。



授業では、マネジメントに関する文献研究を進めると共に、保育園やこども園、幼稚園等の運営者から「自らの保育事業の展開と現況、運営理念等」についての話を聞くこと、さらに受講者が講師と対話することで学びを深めていきたいと考えました。

2021年度前期に実施した「保育マネジメント論特論」では、文献研究と実践研究、自己課題を重ね合わせることにより、保育の場ならではの「保育マネジメント」の特色や可能性が見えてくると考え、2名のゲストスピーカーに登壇していただきました。

2021年5月18日（火）のこどもむら理事長柿沼平太郎先生の講義（質疑応答を含む）の記録と、2021年5月25日（火）の株式会社こどもなーと主宰者和泉誠先生の講義（ブレイクアウトルーム及び質疑応答を含む）の記録を紹介します。

魅力的な園運営を進めている先生方の話や受講者との語り合いの中から、保育マネジメントの在り方が浮かび上がってきます。どうぞお読みください。

2　こどもむら理事長柿沼平太郎先生に聞く

2021年5月18日（火）18：20～19：50　授業名「保育マネジメント論特論」

宮里　皆さんこんにちは。保育マネジメント論ということで、保育の場所、子どもの居場所がどういうふうにしてできあがっていくのか、保育の場が生き生きとしていくためにどのような働きがあるのだろうということをゆっくり考えていく授業です。それぞれが心ひかれる実践例を報告し合ったり、その中に流れているもののことを語り合ったりとか、そんな感じでスタートしているところです。今日はゲストをお招きする特別な会です。柿沼先生のお話を中心に、後半はぜひ多くの問いを発していただき応答があればいいなと思っています。では講師の先生をご紹介します。認定こども園こどもむらの柿沼平太郎先生です。どうぞよろしくお願いいたします。

柿沼　ご紹介いただきました柿沼です。埼玉県の久喜市っていうすごい東部のほうの田舎のほうなんですけれども、そこで認定こども園や小規模保育所、学童をやっています。今は園長を退任して理事長だけになっているので、どちらかというと、このマネジメントみたいなことがすごく求められるような立場になっているのかなと思っています。

（1）柿沼先生　語る

①「こどもむら」がある久喜市について

ア：お先真っ暗なスタート・理事長になった20年前、すでに人口が減少していた

JR宇都宮線の栗橋駅の左側のエリア、西口のエリアに、こども園二つと、小規模と保育所二つ、企業の保育所、学童、支援センターをやっています。最近ではマタニティハウスっていう事業も始めたりとかっていうことで、一つのエリアにまとめて保育園があるっていう感じです。

何でこんなことしているのかっていうことが今日の経営的な話なんですけれども、ここのエリアっていうのは人口減少が著しい。JRの久喜市の栗橋っていうエリアは、僕が25歳で幼稚園の世界に入って26歳で理事長になっているんですけども、そのときにはもう子どもの数は激減していて小学校も5校しかなかった。ちょうどその前年ぐらいに3校に統合されて、それでも一つの小学校が一クラスしかないみたいな。幼稚園は、もとも

と200人定員でやってたんですけど、100人ぐらいしかいなかった。3歳児で入園する年少さんの数も15人ぐらいで、先行きは真っ暗な状態だったんです。で、私学なので、やめるっていっても、国に返還をしたりとか、土地も寄付をしたりっていうやめ方をしなくちゃいけないですし、さてこれで本当に子どもの数が減ってく中で、幼稚園っていうものが必要なのかどうかっていうことがスタートだったんです。今の人口減とか少子化みたいなものを20年前にもう経験しているエリアだったっていうのが非常に大きいのかなと思っています。

イ：僕らの事業は社会に必要とされて初めて成り立つ

僕らの事業っていうのは社会に必要とされて初めて成り立つ仕事。だから自分たちがどんなにいい運営だと思っていても、どんなにすばらしい教育、保育を提供していると自負していたとしても、子どもやその家庭がいなかったら、そこの地域では意味を持ちづらいものになっちゃうと思っているんです。だから例えば単純に、子どもの数がゼロになれば幼児施設は要らないですし保育施設も要らない。そういったことが起こり得る可能性が今の時代はあるわけですよね。

例えば離島だとかどんどん保育所がなくなっていって、で、その離島でもやっぱり少数でも保育の場は必要なので、家庭的な保育所だったり保育ママだったりっていうことを国が整備をしていっているってことだと思うんです。要は国民の1人でも困らないようにはするけれども、保育所とか幼稚園とかっていう事業ではないものが子どもの育ちをケアしていくっていうことになっているんだと思うんです。そういったことっていうのが、僕の根幹になっているっていうことが、まずスタートとしてある。

この資料は2016年ぐらいに作った資料です。4、5年たつとこんなに減ってくんだっていうのがわかる。ただ虐待や国の借金はどんどん増えてるっていうのが明確になっているんですね。虐待件数っていうのは、窓口が増えたとか通報しやすくなったとか、いろんな理由があると思うんですけど、うちの園でも虐待やネグレクトだとかで児相対応が増えたので、体感としてもあるなっていう感じはあります。幼稚園やこども園などの役割っていうものがどんどん変わっていってるのかなと思います。

こどもむらの事業変化と久喜市伊坂地区における子ども人口

少子化地域における私立幼稚園の限界から、認定こども園への移行、子育て支援機能の強化をはかり、行政や関係機関、地元住民の方々との連携をすすめ続けると、集合住宅誘致や開発等がなくとも、地域の子ども数にも変化が影響をもつ可能性がある。

旧栗橋町（伊坂地区）の概要等	年度		園児数 0～4歳	久喜市 出生率	久喜市 0～4歳人口	伊坂地区 0～4人口
	昭和50年	栗橋さくら幼稚園開園（定員80名）				
	昭和52年	（定員200名）				
伊坂地区区画整理事業開始	昭和62年（～平成34年3月31日）					
栗橋町小学校3校合併	平成13年		125名			
	平成14年	認可外保育所開所				
久喜市へ合併	平成22年		208名	1．03(町)	5841	
	平成23年			1．19	5844	
子ども子育て関連3法	平成24年	認定こども園こどもむら開園	235名	1．09	5732	
	平成25年	子育て支援センター開園		1．11	5708	
	平成26年			1．13	5555	152
子ども・子育て支援新制度施行	平成27年	（新）認定こども園2園、小規模保育園		1．21	5438	154
	平成28年		319名	1．11	5391	172
	平成29年	学童保育、駄菓子屋、カフェ開設		1．17	5456	164
	平成30年	企業主導型保育園、小規模保育園開園		1．09	5205	176
	平成31年	学習支援、地域支援事業開始		1．06	5130	167
	令和 2年	マタニティハウス開始	407名		4991	182
新子育て安心プラン作成	令和 3年	ベビールーム開始			4867	184

ウ：子どもの数が減れば幼稚園の役割は変わっていく

僕が子どもの頃、40年前には、人口も200万人近くいて、子どもの行き場がないほどだった。専業主婦の家庭が多くて、家庭や地域、親戚のつながりもあったりして、家庭での子育てもある程度できていた中で、幼稚園は集団の学びができるところに行くっていう役割でよかった。それが家庭もどんどん変わり子どもの数も減っていく。そういった中で、幼稚園の役割もどんどん変わっていかなくちゃいけないと思っています。児童虐待件数が増えたら、児童虐待に対する何かを考えるってことですよね。そうでないと社会に対しての役割っていうのを達成できないんじゃないかと思っています。

今はコロナ禍で、こんなふうになるなんて誰も思ってなかったのかなと思うんですけれども、この先もっとわからないですよね。だから今、目の前にいる子たちの将来についていろんなこと考えたときには、じゃあ、どんな力が必要かなっていうのは、幼児教育とか保育とか、子育てで求められるものだと思います。国の借金が150兆も増えていて、コロナのときに10万円をもらってうれしかったり手当が出て企業さんとかもありがたかったりしたんですけど、借りているものなので誰かが返さなくちゃいけない。今の子たちが返さなきゃいけないですよね。そんなことをいろいろ考えていくと、幼稚園やこども園は、果たすべき役割を果たしていかなくちゃいけないと強く思っています。

②「こどもむら」で大切にしていること

ア：今の自分たちの役割っていうのは20年後の子どもたちの社会を考えていくこと

高齢者を支える社会の到来って、随分前からいわれていたんですけれども、コロナになって借金も増えて子どもの数が減ったから、今度は1人で4人支えるのかとか、これもう本当に間近だなと思っているんです。うちの子どもは中学校3年生と小学校5年生なんですけども、あなたたちが大人になったときは1人で4人の大人、社会的な弱者とか子どもも含めてですけども、支えるんだよって言っています。1人で4人支えなきゃいけない、1人に10万円出すなら40万円なくちゃいけないんだよって。プラス自分の生活だよねって。いくら稼がなきゃいけないのっていうふうな話とかをよくするんです。こういうことをしっかり考えて教育や子育てをしていかないと、この国はかなり厳しいものになっていっちゃうのかな、なんてことをよく思っています。

子どもの未来につながる社会問題を挙げると地震や気候変動、環境の問題、資源、そしてウイルス、もう予測つかないわけですよね。そうすると「うちの園ではこれだけいい保育をして、こんな子どもを育てていましたよ、だから大丈夫です」っていって社会に出せるのかってことに、僕は矛盾を感じるようになってきちゃった。社会が豊かにならなかったら、自信を持って豊かに生活できますなんていえないのかなと思ったんです。

一つの園でやっていくなんてのは難しい話なんですけれども、でもできないからといってやらないというのでは仕方がないので、自分の目の前でできることを一歩一歩やっていく以外ない。同じように思ったり考えたりする人たちがいて、そことつながっていったりすると社会全体が大きくオセロのようにいつかは変わっていて、子どもの未来のためにみんなで考えるみたいなものになっていけばいいな、その一つの歯車ぐらいになっていけたらうれしいななんて思っています。幼稚園として、家庭や国も安定した中で子

どもを育てていた時代と、今の自分たちの時代は違う。20年後の未来も違うだろう。今の自分たちの役割は20年後の子どもたちの社会を考えていく役割だと思うので、常に自問自答しながら運営しているようなかたちです。

イ：幼児教育とは「幼稚園における教育、保育所等における教育、家庭における教育、地域社会における教育」全体を含む広がりをもった概念

幼児教育の意義及び役割（文部科学省HP）

幼児教育の範囲

・幼児とは、小学校就学前の者を意味する。幼児教育とは、幼児に対する教育を意味し、幼児が生活するすべての場において行われる教育を総称したものである。具体的には、幼稚園における教育、保育所等における教育、家庭における教育、地域社会における教育を含み得る、広がりをもった概念として捉えられる。

家庭・地域社会・幼稚園等施設

・この家庭・地域社会・幼稚園等施設（幼児に対する教育機能を担う幼稚園や保育所等の施設を言う。以下同じ。）における教育は、それぞれの有する教育機能を互いに発揮し、バランスを保ちながら、幼児の自立に向けて、幼児の健やかな成長を支える大切な役割を果たしている。

具体的には、家庭は、愛情やしつけなどを通して幼児の成長の最も基礎となる心身の基盤を形成する場である。また、地域社会は、様々な人々との交流や身近な自然とのふれあいを通して豊かな体験が得られる場である。そして、幼稚園等施設は、幼児が家庭での成長を受け、集団活動を行いながら、家庭では体験できない社会・文化・自然などに触れ、教員等に支えられながら、幼児期なりの豊かさに出会う場である。

この家庭・地域社会・幼稚園等施設の間で、幼児の生活は連続的に営まれており、この三者で連携がとられ、幼児への教育が全体として豊かなものになってはじめて、幼児の健やかな成長が保障される。

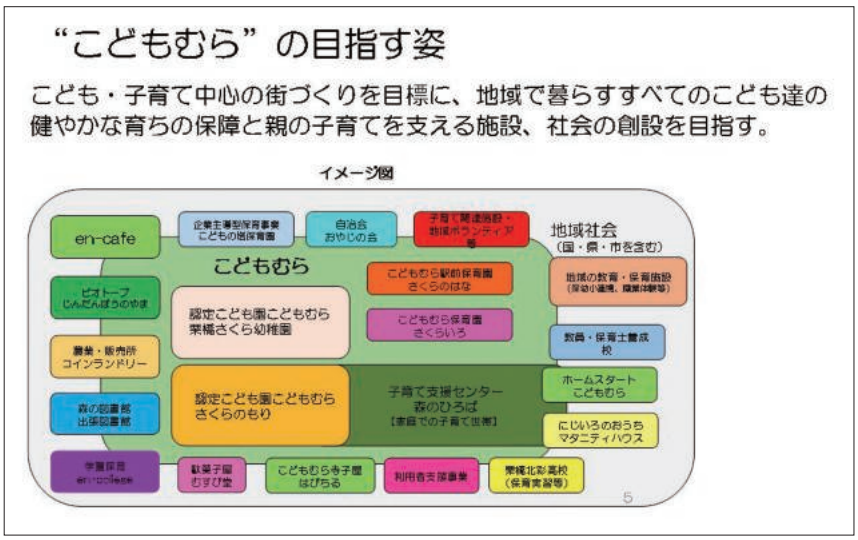
僕の話を聞くとそれ幼稚園やこども園でやってる話なの?とか、それはおたくだからできるよねみたいなことをよく言われます。でも幼稚園からスタートしてもできているっていう事実はあるので、地域性や考え方などいろんなものはあるんですけど、うちの町みたいなエリアだったら可能性はあるっていう一つの実践として捉えていただけたらうれしいと思います。

今回、改めて幼児教育って何なんだろうって調べてみたら最初から書いてあったんです。幼児教育とは「具体的には、幼稚園における教育、保育所等における教育、家庭における教育、地域社会における教育を含み得る、広がりをもった概念」だって。ああ、そうかそうかって、そうすると僕がやっていることも幼児教育と言っていいんだなと思いました。

地域に子育て力がなくなったり、地域に子どもの居場所がなくなったら、「地域社会における教育」っていうものが欠けてきてるんじゃないかって。昔はもしかしたらあった。ガキ大将がいたり、地域のおじさんがいたり、何か面白そうな大人がいたり、子どもが行ける場所があったりして地域社会での教育があった。ところがだんだん社会が変わっていくにつれて、いろんな問題が出てくる。地域社会における教育っていうものが減っていったのかなって。それをうちの園ではケアをして「地域の子育て力を！」というふうに頑張ってやっているんです。それがそもそも幼児教育としてよかったんだなっていうのを改めて思ったのです。

うちは私立の幼稚園から認定こども園に移行したんですけれども、やっぱりここに書いてあることって、実は僕が20年前、幼稚園のときに経験していたことなんです。認定こども園になりたくてなったというよりは、一つ一つの課題に向き合っていたらこうなった。近くに保育所がなくてうちの幼稚園しかない、何とか長時間預かってくれないかとか、いろんなことでやっていたら、結果こども園になったっていうだけなんで、だから目の前の課題を一個一個やっていたら、こども園になったねみたいなこと。これからの保育施設は、ダイバーシティっていう考えが必要だと思っている。いろんな宗教の人も、いろんな人種の方もいるので、ダイバーシティみたいな考えを持っていこうねっていうのがうちの園の考え方になっています。

ウ：「こどもむら」は、ゆっくり村になっていった



1975年の4月にもともとの幼稚園ができて、大きく変わったのが2012年あたりから、ここからがこども園っていうことで、こどもむらっていう名前を作ったのは、子ども、子育て中心のまちづくりをしたいねって、子どもが育ちやすい一つの地域社会みたいな村を作ったらいいかなっていうんで、名前をこどもむらにしました。最初は結構笑われたんですけど、今、何となくかたちになってきたら、村になってきましたねなんて言ってくれる人もいたりします。目指す姿っていうところで、まず真ん中にある、この肌色というかアイボリーみたいな色のところがスタートだったんですけれども、何となく図面にしていってこんなものをやっていたら、だんだん増えてきたようなかたちになっています。

コインランドリーと書いてあるんですけど、着工がもう少しってとこなんですけど、コインランドリーも実は子育て支援じゃないかって思っている。働いているお母さんって洗濯したりとか、これから梅雨の時期、乾かなかったらストレスだよねって。でもコインランドリーが近くにあれば、子どもを預ける前にコインランドリー寄って洗濯物入れて、子どもを預けて、専業主婦の方であれば、ちょっとお母さんたちとお話ししている間に乾いて、家に帰ったら畳むだけっていうのも一つの子育て支援かなと思う。

エ：学園の理念「ここにいるっていいね、いっしょにいるっていいよね」

学園の理念は、「ここにいるっていいね、いっしょにいるっていいよね」。これは昔、網野先生（東京家政大学教授）が言った言葉です。職員も保護者も、子どもはもちろんですけど、地域の人もここの場所に来たら何かいいなって。一緒にいるっていいよねって考えた。1人だと一緒にいるということにはならない。2人以上は一緒にいるということになるので、誰かと一緒にっていいよねって思えるような場所にしようっていうことです。保育理念は、2018年、コロナの前の4月に大きく変えたんです。みんなで話し合って、やっぱり未来を作るとか話したんですけど、これだけ閉塞感漂うところだから、未来を切り開く子どもを育てようって。で、多様性ですかね。こういう保育理念にしています。

③ 広がり始めた「こどもむら」の街づくり

ア：栗橋さくら幼稚園とさくらのもり、そして小規模保育所へ

栗橋さくら幼稚園の定員は273名。0から5歳の子どもがいる認定こども園になっています。古い制度の認定こども園で、0から2歳がさくらのもりで、3歳から5歳が栗橋さくらだったんですけども、待機児童の数が多かったので0～5歳の子どもがいるこども園になりました。さくらのもりは90名の園で、2号、3号の子が多いこども園。栗橋さくらは、1号認定っていわれる子が多いこども園になっています。雰囲気が全然違う感じです。行事なんかは一緒にやったり、運動会とか、例えば入園式とかは一緒にやっています。

2015年のときに駅前に小規模ができたんですね。栗橋は区画整理っていって、古い田んぼとか町に道を作って開発をしたんですね。で、バブル期に計画があって高度経済成長でどんどん国の状態がよかったので、この町にもどんどん人が来て家ができて潤うって予定だったんですけども、実行されたときにはバブルが崩壊してたので、道だけできて移り住む人もいなければ、逆ドーナツで都内に戻っていっちゃったんですね。駅前の土地が全く動かないで駐車場しか使い道がないという土地になった。駅前にコンビニすらないような場所だったんです。これだと子どもは集まってこないからどうしようかと考えた。ちょうど27年に新しい制度で小規模事業所っていうのができるってことだったので、駅前に小規模事業所と小規模保育所を作って子育てしやすそうな街をイメージづけようってことで、駅前に19人の保育所を作ったって感じです。

今は、市や地区の状況が少しよくなってきて子どもがだんだん増えてきた。待機児童ができたんで近くにさくらいろっていう施設を作りました。駅前なんですけども、駐車場を挟んで右側がさくらのはなで、左側に企業型の先生たちの保育所を作った感じなんです。隣り合ってやることによって子育てしやすいイメージになればいいなっていうことで、ここは無料でやっています。先生たちのための保育所を作れば、子どもが1歳になって復帰したくなったらここに預ければ復帰できる。なおかつ、保育料はかからないので、ある意味少し自分に使えるということもできているので喜んでくれている感じですね。

イ：子育て支援の取り組み

あとは学童と子育て支援センターです。子育て支援センターは10年前にスタートしました。幼稚園時代から、0から2歳の子の居場所がないよねって思っていて、それって何でだろうって僕は単純に思ってたんです。ちょうど我が家の子育てと重なったのが大きくて、お母さんたちとかやっぱりこんなに大変なんだっていうふうに思っていたわけです。なのでお母さんたちが毎日いられる場所があったほうがいいなって。むしろそれが幼稚園の役割なのかな、みたいにそのときは

思ったんです。ちょうど市町村合併があって、15万の久喜市っていうとこに吸収合併をされたんですね。そうすると、久喜市全体で待機児童に対応するので、久喜市全体には待機児童がいたんです。うちの園も栗橋町のときには幼稚園で保育機能は持てなかったし、待機児童がいなかった。でも久喜市になったら、待機児童がいるようになってうちの園もこども園になれたんです。こども園になれて児童福祉の施設になったので子育て支援センターってのが受託できるようになった。所管の官庁が変わるだけでもらえるものというかできることが大きく変わってきたって感じなんですね。

ウ：子育て支援センターとしての拠点事業・居場所・図書館・公園

10年前に支援センターを作って1年間自主運営をして実績を出したので拠点事業を申請して、今は運営費が出ています。ありがたいことに。コロナ禍で去年は支援センターを開けることができなかったんですけれども、今年からは何となく安定してきたので人数を制限しながらも開けてる感じです。コロナ前には出していた食事は出してないですけど、去年以外は年間で1万から1万2千人ぐらい利用していただけている感じです。ここは無料で使えて拠点事業になっているので毎日来てもいい。朝の9時半から14時半っていうかたちです。

その奥に森の図書館があります。0歳児から2歳児のお母さんたちは、普通の図書館だと子どもが騒いで大変で本もゆっくり見させられない。でも、ここなら安心して子どもが預けられる。子どもの本を一緒に読んだり、ちょっと泣いても大丈夫みたいな、乳幼児を持ったお母さんたちしか来ないので。そういう図書館を作って保護者向けの本、雑誌なんかももちろんですし、育児本だとか、食事の離乳食の作り方とか、そういったものをできるだけ増やすようにしています。

地域に公園もなかったんですね。公園予定地は20年間ぐらいずっとあったんですけど、公園ができることはなかったんです。ようやく最近公園の着工が始まりましたが。子育て支援センターを作ったときに公園がなかったので、子育ての公園を作ってあげようっていうことになって、空いたところを仕切って少し遊具を入れたっていうだけなんですけれども。外が安心して遊べるってことで結構利用者が多かったなという感じです。

子育て支援のプログラムは、地域とできるだけつながっていこうということで、地域のケーキ屋さんがクリスマスのケーキ作りをお母さんたちに

教えたり、その間お子さんは託児をして預かる。園の栄養士さんが離乳食やお正月の料理を教えたりっていうようなことをやっていたり、講師の人を招いて話をしたりとか、悩み相談をやったりとかっていうプログラムがありますね。

地域の畑をやっている人の芋堀りも園児だけじゃなくて地域の子育て家庭の方にも参加してもらっています。誕生会もしています。経済的になかなか恵まれない家庭もあって、誕生会のお祝いをしてあげられない子もいるかもしれないよねという声があって、であればこの地域の支援センターでお祝いをしてあげようということになった。大きなケーキを準備して支援センターでみんなで食べる。家庭ではなかなか準備してあげられる余裕がないけど、ここに連れてくれば、お誕生日おめでとうってケーキも食べられるねみたいな場を作った。併設しているカフェがあるので、今はコロナなのでケーキを一緒に食べるのは避けているんですけど、おみやげにプリンを持って帰れる券を作ってお祝いしてあげて、支援センターの誕生会終わったら、そのチケットを持ってカフェに行くと、カフェでまたおめでとうって言ってもらえる。で、プリンもらって帰る。いろんなところで、おめでとうっていうふうに命をお祝いしてもらえるっていう機会を増やそうということをやっています。

④ さらに必要なことは何だろう？から始まった多様な取り組み

ア：支援センターに来られないお母さんたちのために何かできないかな？

支援センターをやっていて気づいたことは、支援センターに来ている子たち、来られているお母さんや子どもたちってのは比較的安定しているということ。来られないお母さんたちがいるっていうことに気づくんですよね。支援センターを一生懸命やろうと思ってやったんですけど、支援センターをやっているとそういうことに気づいてきて。来られないお母さんたちのために何かできないかなっていって出会ったのがこのホームスタートということです。

運営の会議には自治体がからまなくちゃいけないルールがあるので、自治体の方と、保健センターとか入っていただいています。それで訪問スタッフを養成するための養成講座を作るんです。そこで訪問スタッフを養成して、ビジターさんといって訪問する人を家庭に送っていく。ホームスタートっていうのがあって、1週間に1回2時間程度、計8回なんです。例えば、双子ちゃんが生まれて、一緒になかなか外に出るのが大変というところに行って片方見ておく、など。あとは子どもが生まれて家事ができないっていうと、おうちに行って預かってあげる間に家事をお母さんがやるとか、お世話焼きな感じの事業もやっています。もともとボランティアなので運営費がなかったんですけれども、会議に役所の方が入っていて、役所の方が決算状況見たら、何か探してくるって言って、補助金を探してきてくれた。運営できるぐらいの補助金、人件費までいかないですけども、居宅訪問型の補助金を取ってきてくれた。こういうふうに地域や行政とつながっていくと、きちんとそうやって返してくれることもあるんだなっていう、ありがたいなっていうか、いい学びになったこともあります。

イ：もりカフェや駄菓子屋さん、第三の大人のこと

カフェを併設していて、これは別法人にしています。利益が出たときもなんですけれども、赤字になったときにも別法人にしておいた方がいいんです。駄菓子屋さんは小学生の居場所として作った。小学生はどこで遊んでいるのとか、小学生って何をして遊んでいるみたいなことを思ったときに、出てきたのが駄菓子屋さんだった。

駄菓子屋さんだったらお菓子を買いに行く目的があるので、行けば何かそこで出会いがある。保育士さんと保育の補助をやっていた人たちが運営しているんですけど、そこでちょっと話が聞けたり、あの子どうしてる、あの子学校来てないよみたいなことが聞けたりする。ちょっとした悪さとか、そういったことって昔は近所の大人が怒ってくれたりしたんですよね。でも今はいきなり警察に通報されちゃったり学校に通報されちゃったりする。そうではなくて、いけないことはいけないと教えてくれる大人が地域にいる。僕ら、それを第三の大人って呼んでいるんですけど、親と先生以外の第三の大人がいる場所という感じで駄菓子屋さんをやっています。

ウ：お父さんを支えたい

今、僕はお父さんが過労で倒れちゃう説っていうのを唱えている。カフェや支援センター作っていたとき、十何年か前の頃ってお母さんたちが子育てを一生懸命頑張っていてお父さんたちの助けがなかなかないよねっていう時代でお母さんと子どもで公園に来ているという姿がよくあった。そこから7、8年たつとお父さんとお母さんと子どもで来てることが多くなる。それが今になるとお父さんと子どもというのがすごく多くなって、例えばデパートとか行ってもお父さんと子どもで来ている人ってすごく多く感じるんです。

でもお父さんってすごい疲れている。平日は仕事をしているのに土日は休みなんだからお父さんちょっと見てて！って言われて見ているお父さんが結構多いんですよ。土日は子育て、平日は仕事みたいな感じで、お父さんは休まる暇がないなっていうのがある。こども園では、おやじの会をやっていて夜お酒を飲むんです。おやじの会はうさぎ小屋を作ったり、砂場を作ったりって一般的なことをやったりするんです。それが卒園してもずっと続いているんですね。今の代表の人の子は小学生なんだけれど、園の運動会とか手伝いに来るんです。で、その打ち上げが楽しみで、皆さんお酒を相当飲む。ただその日だけはお母さんたちに許されて、深夜に帰っても大丈夫だみたいな感じなんです。だから子どものことをやってお酒を飲んで、帰っても大丈夫な日を作ってあげるみたいな、お父さんケアの場所にしているっていう感じです。時代とともにお父さんの状況も変わってくんだなって思っているんで、今できるだけお父さんのケアをするようにって考えています。

エ：地域に還元・マタニティハウス

地域に向けてこの場所を使ってマルシェをやってみたり、これは地域に知ってもらうとか、地域に還元するとかっていう意図でやっています。幼児施設や保育施設って子どもが生まれて初めて知ることが多くて、それまで全く目にも入ってないことが多かったので、できるだけ地域のイベントごととかをやって、知っといてもらうってのがすごく大事だと思っています。

2020年9月からできた新しい事業がマタニティハウス。これが毎日午後の時間、午前中はにじいろのおうちっていって、中古住宅を買って、そこをリノベーション、改装して作ったんですけども、午前中は支援センターじゃないもう一つ子どもの遊び場、入園前の2歳に限定して、遊び場にしていて、1時からはマタニティの場所にしているかたちなんです。ここには助産師さんに2人来てもらってるんですけども、助産師さんが沐浴の練習や授乳の練習したりおむつ替えの練習をしたりするようなものをやっています。産前ケアで始めているんですけれども産前からやっていくことが大切だと感じている。産後の鬱だとか、例えば0歳児の虐待の問題もありますが、やっぱり居場所を作ってあげるって大事だと思う。

生まれてから相談できる所を探すってなかなか大変なので、産前の2週間ぐらいで余裕があるときに、ここに来ておしゃべりしたり、助産師さんの話を聞いたり、ちょっと不安だったりするんでいっぱい相談をしたりできる。公的機関とは違った役割があるっていうことをよく言われます。公的機関だとなかなか質問できないけど、ここだったら普通に友達のように質問できるっていうふうに言ってもらっています。ワンストップサービスっていうのをある程度目指してるんです。産前ケアから始まれば、こぼれていく家庭が少なくなるかなって思っています。

オ：宿題カフェのこと

もう一つ始まったのが宿題カフェ。基礎学力でこぼれちゃう子が結構多かったり、卒園した子でもご両親がいらっしゃらなくて、おじいちゃんおばあちゃんが育てている子もいるんです。そうすると、体力的にも精神的にも子どもの勉強を見てあげられないんだよねっていう声があったので、ここは無料で学校の先生をちょうど退官された、60歳で辞められた人を紹介してもらって。で、その先生とうちのスタッフでやっている感じです。学習だけじゃなくて、居場所になっているので、遊び場としても、基本は学習支援っていうかたちになっています。

カ：そして、これから・利用者支援事業の可能性

何やるっていったら、利用者支援事業っていうのがあって、これが国のほうも制度を作って、国会で何か法案をとおして、今年から予算がつくみたいな話なんです。もともとあった事業なんですけど、うまく機能してなかったので、ここを機能させるっていうふうになっていて、子育てコンシェルジュだったり、子育て相談窓口とか、子育て案内所みたいな。ここに行けば子育ての情報がわかるみたいなことをやろうかなと思っています。

駅前に保育所が二つあったんですけど、隣に塾があったんです、学習塾が。この学習塾が撤退したんですね。空きテナントになっていて、ここを借りて利用者支援事業にしようかと思っている。契約がうまくいったので、来月契約の7月スタートぐらいでこの利用者支援の場所を作ろうかなっていう計画があります。

宿題カフェも、利用者支援プラス学習支援の場としてやっていこうかなみたいな。園の中にあるとなかなか入りづらいよねっていう声もあるので、コンビニに行くみたいな感じで入りやすい空気を作って、子育ての情報が得られるような場所だったらいいかって。これはもうあくまで今頭の中の構想なんですけどね。そんなことを今やろうとしている感じです。

幼児教育の側が社会と必死につながろうとしている感じがありますが、社会側からすると幼児教育や保育とつながろうみたいなことってあんまりないように感じています。それって僕らの発信が足りないのかと思っていて、その壁が崩せるといいと思っている。幼児教育とか保育とかっていうことの大事さや良さを社会に発信できたらいいなと思っています。

キ：出張図書館の取り組みを始めたことでできた医療機関とのつながり

出張図書館っていうのは、医療機関とかに本を届けるだけなんです。待合室で待っていると医療機関の本のコーナーとかあるじゃないですか。あの本っていつも変わんないことに気づいた。読もうと思って取っても表紙と裏表紙しかなかったりして、これどうなんだろうって考えた。子どもの様子を見るとどうしても子どもにスマホを持たしちゃっている。でも何か調子悪い子にスマホってどうなんだろう。調子悪いときぐらいは膝に乗っけて本でも読んであげたら、なんて思って、うちには本がいっぱいあるし読まなくなった本とかももらったりするので、それをまとめてそういうところに届けるっていうだけなんです。

出張図書館をやることによって思ってもいなかった医療機関とのつながりができた。医療機関さんからありがたいなって思われる存在になったことで、子どもが怪我をした時に診療時間外でも診てくれたりとか、子どもの安心にもつながってるかな、安全にもつながるかなって。本を読むのっていうのはそういった延長線から出たんですけど、本に親しんでほしいなっていうことがあってこういうプロジェクトをやっている感じです。これは僕の幼少期の経験で、寝る前に母親が一緒に本を読んでくれた記憶がある。それって別に本の内容じゃなくて母親のにおいとか、肌とかふれ合ったりとか、何か愛された感があるのかなとか思っていて、本一つでそういうふうに感じてもらったらいいなと思って始めました。

ク：近所の高校とのつながり

あとは、高校さんの連携があったりですね。近くに高校があって、水害のときに高校の屋上に逃げるっていう避難訓練やらしてもらったり、実習で去年からコロナでできないですけど、実習受け入れしたり、運動会も高校のグラウンドを使うので、すごく広々と使わしてもらったりして、あとは高校生雇用も実はあって、奨学金制度を独自に作ったりしている。働きながら資格取得を目指すっていうことを支援する仕組みも作ったりしています。

ケ：子育て支援と同じように、自分支援を！

資料の最後は、いつもこの写真にしているんです。職員は、カフェのお茶を一月に8回ぐらい、食事も1回とれるようにしているんですね。休憩時間とかにお茶を飲めるようにしているんです。なぜこんなことをしているかというと、こんな訳があります。

ある人と話していたら、いろんな子育て支援をやっていていいねって話のあとに、「でもさあ、現場の保育士さんって明日この園辞めようかっとか、来月、来年は別の仕事つこうかって思ってんだよね」って。「だから、そういうふうに考えている保育士さんたちは、子育て支援って言われても自分支援してほしいぐらいだよね」って言われたんです。

ああ本当だなって思ってですね。保護者の悩みを聞くって自分に余裕がなかったら聞けない。自分に余裕がないと子どもの気づきとかに気づけないっていうのと似ている。何かいろんなことって保育者に余裕がないと素通りしちゃうとすごく思ってですね。特に、子育て支援ってそうなんです。以前の幼稚園時代に一生懸命子育て支援やったときは離職者がすごく多かったんです。もう園の中の空気が悪くて。だから採用をしても数日で辞めたり、4月採用の人3人取っても、3月までに全員辞めちゃったり。

休みやすくみんなでケアできるような職場を作っていかないとダメなんです。子育て支援もやればやるほど職員が疲弊していくみたいなことになっていっちゃうなって思っていて。だからそれだけは気をつけて、できるだけ先生たちが楽しくというか、明日これ飲もうかなって来るだけでもちょっと前のめりになるみたいなことを思っています。今の僕の仕事はどちらかというと先生たちが楽しく働ける環境を作ることかなと思っている感じで、最後はいつもこの資料で終わらせてもらっています。

（2）柿沼先生と対話する

宮里　最後のスライドの一番上の飲み物は何ですか？

柿沼　ラテですね、抹茶ラテと多分モカか何かと、何かそんなんじゃないですかね。

宮里　おいしそうですね（笑）。柿沼先生のお話から、どういう状況が安定なのか、固定している状態が果たして安定なのかっていうことを思ったりしました。柿沼さんの状態を聞けば聞くほど、生きているみたいな感じがします。それを不安定と思うと不安定だけれども、進んでいる状態に安定感を感じる人にとってはこれが居心地がいいのかもしれない。考えたいポイントがたくさんありましたね。

どうぞ皆さんから、質問や意見をどうぞ！

質問 1

◆ お話を聞いていると町に対する愛情とか、久喜市全体、久喜市に住む人に対する思いっていうものがある。その思いは最初からお持ちだったのか、働いている中で自分にそういう思いがあったっていうふうに気づいたものなのかっていうところをお聞きしたい。

◆ もう1点は、駄菓子屋さんをやろうと思ったんだよねってお話があったときに、その話している先っていうのは、園の園長先生たちなのか、働いている先生方の声を拾えるような仕組みが、先生のところにはあるのか、その仕組みが何かあればお聞きしたい。

○何かが起きたときに話すのは基本的には職員になります。一緒に働いている職員の人たちといろんな話をします。新しいこと始めると大体反対するんです。でも1人か2人でも「いいですね」って言ってくれた人がいるときにはその職員とやっていくみたいな感じになっています。

どちらかというと反対の理由は、自分たちが大変になるとか新しいことに対する漠然とした不安。でもやっぱり僕らの基本は子どもですよね。子どもがあって保護者なので、子どもにとってどうかっていう視点で、やったほうがいいことはやっていくみたいな感じにして、全員に反対されたらやめるとは思うんですけど、1人でもいいですねって言ったら、やるっていう感じです。もともと職員が10人ぐらいしかいなかったんですよ。パートの事務さんと一緒にいることが多かったので、その人とやってったっていうかたちが多かったです。今は70歳近いんですけどもマタニティのほうをやってくれています。その人中心にどんどんやってくれているって感じですね。

○新しいことってやっぱりなかなか理解されないじゃないですか。だから、だめだったらやめちゃおうって言ってるんです。やってだめだったらやめればいいかなって、やらないと何も変わらないので、とりあえずやってみる。それぐらいの軽い気持ちでやってる感じがありますね。

社会に必要じゃなかったら必要じゃない事業だと思うんで、やっぱり社会が必要だと思えば、多分そこを必要だと思ってくれる人がいたり、ホームスタートで話したように、行政の人がお金を持ってきてくれる、補助金を持ってきてくれるってことも起こるので、だから社会に必要かどうかが大事だっていう思いでやっているつもりです。

○僕は栗橋ってあまり好きじゃなかった。幼稚園とかも嫌だったんですよね。幼稚園って女性の職場みたいなところがあって、何かそこに男の人が入るっていうのが嫌だった。

でも、学校卒業してちょっとぷらぷら遊んでいるときに父親が倒れちゃって、やってくれっていわ

れたんです。だからそんな愛情もなかったんですけども、ただやっているうちにいろんな声をいただいたりして、やっぱり社会のために恩返しするみたいなことが必要なのかなってようやく今思いだしてきたかなとかいう感じはあります。

○もともと農家だったんで土地が少しあった。うちにあった財産は土地だけだった。僕が都心にいたらやらなかったかもしれない。別のかたちをとっていたかもしれない。これと同じことをやったって意味ない。その地域によって欠けてるものとか飽和してるものがあると思う。

うちは土地があったので、土地を使って支援センターとかそういうことをやって、それによってだんだんやってくと、もしかしたら昔、土地をこうやって残した人はこういう使われ方をするのを喜ぶかなとか思うようになってきて、「地域が喜ぶ、社会が喜ぶ」っていうことが一番いいのかなって、自分だけのためじゃなくて、最後にぐるっと自分のとこに返ってくれば、経営っていうのは安定するかなみたいなことを思っている感じです。

質問２
駄菓子屋さんや学習カフェについて。いわゆる児童館とか子どもが集まる場所として取り組んでる方はいろいろいらっしゃると思うんですけど、駄菓子屋に着目したことについて。学校の課題をやる場所として名前をつけていくっていうことが他の方と違う発想なような感じを受けました。そういう着目の仕方とか、発想ってのはどこからきているのかなっていうのを伺いたいなって思いました。

○自分の体験上、家庭に居場所がない子っていうのがいっぱいいるよねって、家庭に居場所がない子のために、どこかに場所作ってあげようよっていう思いから始まった。

僕がその子の人生を何とか救ってあげようとみたいな思いはなくて、場所を作ってあげて、そこによほど悪くなったときにはちゃんと叱ってくれる程よい距離の大人がいるってことは大事だって思っています。多分僕も、知らないおじさんとか、駄菓子屋のおばちゃんとかに怒られながら、社会性を身についてきたような気がしたので。僕が違う経験をしたら違うものを作っていたかもしれないですね。

○駄菓子屋っていうことで、ある意味社会勉強にもなったのかな。あとづけでは考えるんですけれども、お金の勉強になるとかね。どちらかというとお金を100円握って行く目的がある場所みたいな。

目的がないと行きづらいじゃないけれど、100円でも50円でも持って行けばお客さんなんで行きやすい。宿題カフェも同じで、勉強ができなかったので、勉強ができる場所とか、経済的に苦しくて塾にいけない子とかいっぱいいるので、そういう子たちに基礎学力をつけてあげるってことは大事じゃないかなと。外国籍の方もこの辺って多いんですね。工場だとかに勤める方がいて、そういう子たちも日本語がちょっとできるようにとか。そこのお母さんたちのために日本語教室みたいなものができたらいいという気持ちがある。子どもとか地域を守るセーフティネットみたいな役割なのかな。

○そういう子が出てきてから場を作るんだったら間に合わない。駄菓子屋さんを開けたら毎日1000円とか500円とか持ってくる兄弟がいたんです。1、2年生で。家のお金を持ってきちゃったんです。

その子たちの家は園から100m位の所なんですけど、お母さんたちが夜8時まで帰ってこないんです。やっぱり居場所がない。家庭があっても居場所がなくてこんなに近くにいたのに全く気づかない子どもたちがいることも、駄菓子屋を開けたことで気づくことができた。行政の方と一緒に話し合ってちょうどいい居場所ができて今は安定しています。そういう子たちが夏休み居場所がないと困っちゃうので。後追いなんですけれども宿題カフェを作った。そういう感じで作っています。

質問３
駄菓子屋にいる大人とか、何かそういう方たちに興味を持ったんです。そういう方たちはどのぐらいいらっしゃるのか、どういうふうに交流を持ってるんだろう。久喜市の地元の方でみんなずっとそこが大好きな方たちなんですか？そういうことを伺えたらうれしいです。

○働いてる人たちは、久喜市や近隣の市町村の方が多いと思うんですけど、何か特別にここが好きでっていうのは多分あんまりないかもしれないです。普通に募集して普通に来てるとか。誘い合って来てくれていることとかあるんですけども、特別に何かってことはないかなとは思うんです。

ただちょっとほかの園と違っているのは、園長はみんなパートさんから上がってる方たちなんです。もともとは5時間とかの勤務だった。子育て中だったりした人たちが、正職員になって園長になっていくっていう感じなんですよ。全員そうなんですね。事務の人も3時間の事務だったのが、だんだん時間が延びて正職になって、センター長をやって、マタニティの担当もやってみたいな。

○子どもを育てているお母さんたちって働き方もその子どもの年齢によって変わってくる。パートで始めて、もうちょっとできるなら正職に、とだんだん変わっていくのがいい。

そうするとパートさんの気持ちとかシフトとかがわかっているので、その職場ではパートさんがほとんど辞めないので安定していく。異動がいっぱいあるので、駄菓子屋さんをやっている人も一時預かりをやったり、保育士なんで保育現場があったりした人です。もともと八百屋さんの娘で地域のことをやっていた人だったので、その子育て支援みたいなほうから、駄菓子屋やるんだけどやる？と聞いたらやるって言ったんで、駄菓子屋さんになってもらった。職員は全体で140人ぐらいいるんですよ。結構人数は多いんです。どんなにいい人でもこれだけ人数が多くなるとマネジメント能力がすごく試される。いい人であっても上に立つとなかなか組織がうまくいかなくなっちゃったりとか、いろんな課題があるので、こういうところはきちんと考えていってあげないといけないと思っています。管理委員会とかいろんな委員会を作って、主幹以上が出る会議やリーダーが出る中堅の会議、園長の会議とかを作んなきゃだめだと考えて、キャリアラダーみたいなものも今取り組んでいるんです。

質問４
保育者が自分のよさを理解するようになるきっかけみたいな、自分が何者で自分は何ができるんだろうみたいな、自分のよさを理解するようになるきっかけや工夫について教えてください。

○今日学童の話し合いがあったんです。ゴールがあって、こういういい保育をしようとか、こういう保育をしようって計画的にやったっていうよりは、人を育てる場所なので、どういう子を育ててほしいかっていうことに対して、いろんな道があっていいんじゃないかって思っていて、それに向かってチャレンジしていくってのがすごく大事だよねって話をちょうどしてたんです。

それは自分でも話しながら、ああそうだなって思った。そうやって話しながらも、そういういろんな道のチャレンジの仕方を受け入れる度量がないとダメ。そのチャレンジの仕方は違うんじゃないなんて言ったらチャレンジしなくなっちゃうので、育たなくなっちゃう。でもゴールがきちんと定まって、こういう子を育てたいんだとか、こういうある意味、施設の仲間にしたいんだとかっていうことがしっかりあればそこに向かってチャレンジをした1年にしようねみたいな感じになっていくんですよね。

○チャレンジも失敗も受け入れながら、保育者とか学童の指導員とかが失敗をしながらも自分で試行錯誤しながら成長できるような場をきちんと作るっていうことが、管理者に求められる組織マネジメント、人材育成ですかね。

だからそうやってチャレンジをしていくってときに、もしかしてよさっていうのは成功体験とかから生まれてくるのかもしれない。だから悩んで苦しんだり、またはうまくいったり、自信をつけたりっていう繰り返しができるような職場にしてかないといけない。職場の中も多様性がなかったら、多様性の社会で生きる子どもたちを育てようっていったことにはならないと思うんですね。いろんな大人がいて、いろんな考えがあって、向き不向きもあったりして、でもそれでも子どもの成長とか子どもの未来とかっていうことに対して、同じ方向をみんなで向いて、そのチャレンジをよしとしていくっていうことが、僕らには一番求められるのかなって、思いました。

○よさっていうのは、自分の中で気づいてくるものなのかな。こうやってやったらうまくいったなとか、僕これが得意なんだなって自分の得意を使って保育していこうとか、みたいなことなのかな。

今一番思っているのは、本気で人を育てるっていうことを真剣に考えなくちゃいけないということ。子どもだけじゃなくて、職員に対しても。ようやく本気で人を育てよう、育てたいな、育てられるかなぐらいなんですけど、人を育てていこうっていう思いにようやくなった。20年かかりましたけど。

質問５
学童保育の高学年の子たちが会議、話し合いをしたあと園カフェでご飯を食べていい気持ちになるという話をしていただいたんですけれども、具体的に高学年の子たちはどんなことを話し合っていたのかなっていうのが気になりました。教えてください。

○お泊り会みたいな、夏休みをどう過ごすかみたいなことを5、6年生中心に話し合っていたと思います。

寝食をともにする時間は日常とは違う時間になるので、朝から絵とか、夏のイベントはどうするかとか、そういったことを、いろいろと話したっていうのを覚えています。児童期の発達と幼児期は全然違うので、できるだけ子どもたちが自分たちでルールを作って自分たちで計画を立てていくっていう時間を大事にしているっていう感じですかね。大人の言うこと聞かないですもんね。

○子どもたちは、自分たちのルールじゃないと。何か難しい時期だっていうことは教えてもらっているので、できるだけそれも人として、子どもとしては扱わずにやっぱり同じ人間として対話していくってことだと思っている。

学童の子たちは、自分たちは自分たちのルールでいい場合とそうでない場合もわかるだろうし、子どもたちの計画を尊重してやっているっていうかたちかなと思います。

宮里　皆さんありがとうございました。柿沼さんの実践をもっと知りたいと今日も深く思いました。この授業はマネジメントがテーマなのですが、子どもの居場所や暮らしやすい生活のことがテーマになってくる。ぐんと広がりそうに思います。質問っていいですね、聞けば聞くほど柿沼さんらしい回答が返ってくるので、もっといろいろ聞きたいと思ったりしたところです。今回のお話からさらに学びを深めていきたいと思います。ありがとうございました。

柿沼平太郎先生の語りから捉えられる

保育マネジメントの実際

＊未来を見据えた上で、「今なすべきこと」の価値を自問自答する

「僕らの事業は社会に必要とされて初めて成り立つ」という言葉から分かるように、園の存在理由を「必要とされている」という関係性におき次々に事業を展開しています。

自園の存在理由を社会が求めているものに応える役割と捉え、既成の園種を超えて「子どもの育ちをケアする」という価値の実現を課題とし、「20年後の子どもたちの社会」に眼差しを向けています。

空間的な多次元性と同時に、20年先を見据え現在の具体的問題に対処しようとする時間的視野の奥行きによって、様々な取り組みを提案し実現しています。

＊人と人の直接的なつながりを通して相手の状況を理解しケアしようとする

地域の表面化しにくい層で困っている多様な存在をかぎ取る共感性があります。

支援センターに来られない人や家事負担であえいでいる人、疲れている父親などを共感的に察知し、自由な発想で支援の形を提案していきます。

生活に密着した斬新なアイディアを提案し保護者の暮らしやすさを支援しています。地域に根差した多様な人的ネットワークを活かしていきます。20年後の社会を見据えた上で、今を生きる生活者の視点に立つ子育て支援の実現。外国人や経済的な弱者、センターに来られない保護者や小学生の居場所づくり、父親支援など、隙間的存在への支援事業を次々に実現しています。（記録は2021年5月18日現在のもの。その後も新しい支援事業を展開しています）

＊外部に向かう地域支援のベクトルと、内部的な同僚支援とを両義的に成立させようとする

保育者の本音に触れながら、働く者が休みやすくみんなでケアできるような職場を作っていこうと決意し実行しています。

「支援は循環する」ということを実感し実践しています。自分自身の取り組みが常に新しさへの挑戦であることを自覚し、「チャレンジ」の重要性を感じています。

試行錯誤しつつその人らしさを発揮するのを待つことで事態が好転するのを見守っていきます。大人に対しても保育的な価値観のもとでかかわり、同僚性を育んでいく「園文化」を醸成しています。

3　こどもなーと代表和泉誠先生に聞く

2021年5月25日（火）18：20－19：50　授業名「保育マネジメント論特論」

（1）和泉先生　語る

①株式会社なーとについて

ア：会社の概要

会社概要	株式会社なーと 2014年2月14日 設立 資本金 1,000万円
	家庭的保育施設　2カ所 小規模保育施設　5カ所 絵本図書館　1カ所
	園児総数　91 名 従業員　68 名

保育理念

遊ぶことは学ぶこと。

子どもも大人も、全ての人の主体性を尊重し、より良い地域・社会づくりを目指します。

会社理念

株式会社なーとは保育事業を通じ、子どもたちに学ぶ楽しさを発見してもらい、
子どもたちの器（モノの見方、考え方の基礎）を大きく育む為に尽力していきます。
「共育」こどもに教えるのではなく、保護者もスタッフもこどもも共に育っていく。
その姿勢を大事にしたいと思います。

今日は保育マネジメント論というところで、私がどういうかたちで保育施設運営をしているか、マネジメントという視点ですよね。そこと、そこに至るまでのプロセスを併せてお話しできればなと思っています。そのあとで皆さんと一緒にディスカッションする時間なども作れたらいいかなと思っています。そちらまでちょっとおつき合いいただければなと思いますので、よろしくお願いします。

簡単な会社の概要です。2014年の2月に設立。現在は家庭的保育施設が2カ所、小規模保育施設が5カ所と子どもたちのための絵本図書館の1カ所の運営をしています。小規模とか家庭的保育施設なので園児の数はそんなに多くなくて、7カ所全部合わせて91名です。従業員は正規職員が38名、パートさんアルバイトさんなど含めて66名の方が、お仕事してくれています。

保育理念は「遊ぶことは学ぶこと」子どもたちが主体的に遊んで学んで、そして、そこにかかわる大人たちも同じように、主体的にかかわり合いながらお互いが学び合っていく。ともにそこで生きてくっていうことを目的としています。「こどもなーと」という名前。子どもとものとアートの三つを掛け合わせた造語です。子どもたちが発音しやすいように「こどもなーと」という名前になっています。

イ：私が幼児教育にかかわるようになったきっかけは、かわいい娘が生まれたこと

私はもともと専門が美術で、大学で美術を学んだあと、大学の助手や専門学校の講師とかをしながら生活していて、そのあと美術制作の会社を作りました。会社といっても、特に従業員がいるというわけではなくて基本的には1人でやるんですが、私の周りには美術系の大学を出て仕事がなくて困っているアーティストがたくさんいたので、彼らと一緒に何かできるんじゃないかなと思った。美術制作の仕事を取ってきて、いろんな周りにいるアーティストと一緒に、その仕事をワークシェアするっていうようなかたちをとっていました。で、イラストレーターとか彫刻家とかデザイナーとかですね。ウェブデザインから店舗デザインとか建築まで、いろんな幅広いような仕事に対応ができるようになってきたので、そういったかたちで美術の何でも屋みたいなかたちでしばらくは活動していました。

油絵が専門だったので、油絵を描いて、それをバイヤーさんが買いつけに来てくれて、百貨店などの美術サロンで売っていただいてある程度生計が立つというような生活をしていたんですが、2005年に娘が生まれたんです。娘がめちゃくちゃかわいかったので、今もかわいいんですけど、もちろん。娘がかわいくて仕方がないので、どうやって、その娘とかかわりながら生きていくかっていうことをずっと考えていました。

娘が1歳半ぐらいから、公立の保育所に預けることになったんですが、保育所で過ごすうちに、娘が何かだめって言われることが多くてやりたいことがなかなかできないっていうことを言いだした。もちろん集団生活の中ではそういったさまざまな制約があるっていうことは理解しているし、そういうもんだよって言ってしまう部分と、でも、そうじゃなくて、やっぱりやりたいことをやらせてあげたいなっていう思いとが入り混じって、何かできるんじゃないかなっていうことを考えるようになっていきました。

ウ：はじめは「出張美術教室」というかたち、そしてアトリエへ

私が娘に対して何か教えるというとおこがましいですけど、何か伝えていくときに、何ができるだろうって思ったときに、やっぱり一番胸を張って伝えられるのは美術をとおしてかなと思ったので、一緒に美術制作、アトリエで何かそういった活動をするっていうことをできないかなと思った。

一番初めは2008年、神戸市灘区、ここに義理の母が音楽教室をやっているスペースがあったので、そこで空き時間を利用させてもらって、出張美術教室というかたちで始めました。ただ、当時3歳だった娘を連れて、大阪から約1時間ぐらいかけて移動があって、絵の具とかいろいろ材料を持って、そこに通うっていうのが、なかなか大変だったので、2010年には思い切って自宅の近くに3階建ての建物を1棟、ちょうどよさそうな物件があったので、そこを1棟借りして、そこをアトリエにするっていうかたちを取りました。

上の写真がそのアトリエを造ったときの2階の部屋で、一番初め初日ですね。5歳になった娘と当時2歳の息子と、まず一緒にお弁当を食べるところから始めました。まだあんまり素材とかも何もなくて、本当にがらんとした部屋なんですけど、ただ、ここでは何をしてもいいからねっていうようなことを子どもたちに伝えて、一緒に何がしたいっていう話をするところから始めていきました。

エ：安定した運営になるように外国人アーティストにハウスシェアする

東京などで考えると安いとは思うんですけど、大阪で月20万円の物件ってまあそこそこの金額で、それがやっぱりアトリエとして地域の子どもたちも利用してもらえるようにと思って、会費制、今で言うとサブスクみたいな感じですよね。毎月会費を払えば、好きなだけ利用していいよっていうかたちにしていたんですけど、その会費が月4000円だった。大体50人弱の子どもたちが登録してくれて利用していたんですけど、50人でも単純計算で20万円なので、家賃ちょうどぐらいになってしまう。実際には光熱費や材料費、あと、もちろん1人で全部見れるわけじゃないのでスタッフを雇用したりとかして、スタッフの人件費とかあると、どうしても赤字になってしまうんです。

そこで3階にある部屋が3部屋あったので、そこを住むところに困っていたり、ゲストハウスはすごく高くて生活ができないと言っている外国人のアーティストの人たちに、この部屋3万円でどう？って言ったら、みんな住みたいって言っていたので、そこをハウスシェアするかたちにして、それでちょっと家賃分に補填していくようなかたちにしました。

そこに住んでもらう外国人のアーティストにはルールとして、週1回以上必ずアトリエの子どもたちと遊ぶ時間を作ってもらう。ほとんどのアーティストが日本語がほとんどできないんですけど、英語だったりスペイン語だったり、それぞれの母国語と、あとは本当にジェスチャーとかボディランゲージですよね。あとは絵を描いたりとか何か作ったりしながら、コミュニケーションをとってもらうようなかたちで、それは子どもたちもすごく面白がってくれて、すごくいい時間だったというふうに思っています。

オ：子どもたちが帰りたがらなくて、だんだん預かる時間が伸びていく

これがアトリエの1階部分の写真なんですけど、ここは結構通りに面しているところで、大きなガラス張りの部屋なので、外から丸見えなんですね。そうすると、通りすがりの人が結構、ここって何してるとこですかっていうふうに質問に来られたりとか、ここって一緒に遊べますかとかって言ってくる子どもが結構いました。この写真見てもわかると思うんです。結構、幅広い年齢の子どもたちが、ここで過ごしていて、小さい子だと1歳半ぐらいから、で、おっきい子は中学生ぐらいまでの子どもたちが一緒にここで過ごしながら、それぞれ好きなことをやって過ごすっていうような場所になっていました。だから子どもたちにとっては、結構居心地のいい空間だったんじゃないかなと思っています。

ただ一つだけ困ったことがあって、それは子どもた

ちが帰らなくなるっていうということ。特に小さい子ども、1歳、2歳の子とか3歳ぐらいまでの子どもだと、お母さんがお迎えに来ると「まだ帰りたくない」「まだあれもやってない」って言って泣きだして、それが毎日のように続くとお迎えに来るお母さんたちが次第にお迎えに来たくなくなってくる。それで初めは1時間とか1時間半、ここに預けてっていうようなかたちだったのが、どんどん長くなってきたんですね、2時間、3時間と。そのうち、おむつとお弁当を持参して、朝からちょっと夕方までお願いしますみたいなことが出てきて、そうなると、これはアトリエなのかなっていうような（笑）。

でも、そこで過ごしている子どもたちはすごく楽しそうだし、かかわっている僕らも面白くて、で、何か、この子どもたちと毎日長時間かかわれるようなアトリエになると面白いなと思った。ただ、やはり安全性とか安心できるスペースっていうのが必要なんだろうなと思ったので、そういう体制が取れるように認可外の保育園を作れないかなっていうことを、この頃から考えるようになりました。

カ：大阪市の保育ママ制度を利用。男なのに保育ママ、ということで注目を浴びる！

いろいろ調べていく中で、ちょうど大阪市が保育ママ制度っていうのを始めたところだったので、その制度を利用して保育施設を作れば、そこでアトリエの中で過ごしているような空間、そういう雰囲気を大切にしながら、そういった保育施設が作れるんじゃないかなと思った。そこで大阪市の保育ママ研修を受けに行ったんですね。研修を終えたあとに、2013年に一つ目の保育ママ施設を作ったんですけど、そこは本当に狭いスペースで、子どもの定員は5人定員だったのでかなり応募が殺到してしまって、かなり待機がいるような状況になりました。

保育ママ研修をやっているときにテレビ局が取材に来ていて、テレビ局の方に声をかけていただいて、その研修に参加していた中で男性が僕一人だったので、「あなたママじゃないですよね」みたいな、「保育ママっていう名称になってるけどママじゃないですよね」っていうことで、何でこういうことやってるんですかっていうことを聞かれた。そこから密着取材が入って、大阪のローカル番組ですけど大体15分ほどの特集を組んで夕方の情報番組で流していただいたっていうのがあったので、それを見た方がここに子どもを預けたいとか、ここで働きたいっていうことで、たくさん来ていただいたんです。

研修や公立の保育所実習に行ったりして、約2カ月間はほとんど仕事ができないので、その間の生活費やテナント部分を改装して保育施設にするための改装費用っていうお金の持ち出しのほうが多くて、当時、約200万ほど借り入れをして、それで園を作りました。

保育ママっていうのは大阪市独自の制度だったので、運用補助金っていうのが大阪市から出るんですけど、それが5人定員に対して、約50万円の補助金だったので、家賃を払って、保育士の人の人件費を払ったらもうそれでほぼなくなる。そこで僕も朝8時から夜7時まで、月曜から土曜まで毎日一緒に保育をしていたんですけど、僕の給料は全く出ないっていう状況が約2年間続いた。保育のほうではお金が出ないので、それは美術制作の仕事をしながら何とか生計を立てているっていうような流れでした。

キ：出資者と出会い、株式会社なーと（保育専門の会社）というかたちで運営開始

さっきもちょっとお話ししましたけど、テレビでの放送があったことで、かなりの数の方が毎月申し込みに来られて。ただ、全然子どもの受け入れができないっていうので、何とかして施設を増やせないかな

と思っていろいろと模索していたときに、テレビの放送見て応援します、という方の中で「資金提供しますよ、出資しますよ」っていうようなことを言ってくれる方が何人かいらっしゃったんです。

その方たちといろいろ話をしながら、1人の方が本当にこれは応援しようと思ってくれているんだなっていう人がいらっしゃったので、その方に出資をしてもらうかたちで、2014年に今の「株式会社なーと」っていう保育専門の会社っていうかたちで運営を始めました。

その後、2015年には国の制度で地域型保育事業というのが待機児童解消のための制度として作られたので、大阪市の保育ママの施設も、すべて小規模保育施設であったり家庭的保育施設って呼ばれる地域型保育事業という枠組みに入った。それで認可施設というかたちになったので、それで何とか運営ができるようなかたちになってきました。

そうすると、大阪市で既に認可施設を持っているっていうことで、近隣の自治体のほうからも、摂津市とか吹田市っていうところになるんですけど、そちらにも小規模の施設を作ってもらえないかということで声がかかるようになってきて、少しずつ施設の数が増えてきて、現在のかたちになっています。

ク：小さな絵本図書館の運営・絵本を借りるとポイントが貯まる

最初にもお話ししましたが、小さな絵本図書館っていうのを事務所の横で運営をしいます。これは保育園とは全く別にはなるんですけど、大人も子どももゆっくりリラックスして過ごせる空間っていうのを作りたいなと思って。で、ここで子どもたちが壁に落書きをしたりとか、小さい子どもはお昼寝できるようにお昼寝マットとかブランケットがあったり。授乳室とかおむつ換えスペースもあるので、比較的保護者の方もゆっくり過ごしてもらえるっていうようなスペースになっています。

ここでは、今はコロナの影響で中止しているんですけど、基本的には飲食もOKにしていたので、朝からゆっくり来て、ここで過ごしてお昼寝したりお昼ご飯食べたりっていうようなかたちで、地域の子育て中の方たちが使えるスペースに、子育て支援のスペースとして使えるといいなというふうな場所になっています。ここにある絵本っていうのが、今、約3000冊あるんですけど、すべて寄付していただいた絵本ですね。

もう子どもが大きくなって要らなくなったとか、または出版社の方とか、あとは子育てを応援したいんですっていうような方、いろんな方から絵本の寄付をいただいて、それを無料で貸し出しもできるっていうようなかたちで運営をしています。ここはすべて無料になっているんですけど、大阪市の東淀川区っていうところの独自の予算で、絵本読み聞かせ事業っていう予算を取っていたので、その予算の一部、それをこちらにも回していただくようなかたちで、ここの家賃と人件費、それはぎりぎりペイできるようなかたちになっています。

もちろん、多少赤字は出てはくるんですけど、それはもちろん保育園をうちは運営してるっていうところで、地域の子育て支援にとって必要なことだと思うし、あとは保育園の広告宣伝費みたいなものと考えれば、別に決して高くはないのかなというふうに思っています。

近隣の企業をはじめ、いろんな企業さんに声をかけさせていただいて、いろんなもののサンプル品とかを提供していただいて、それを利用者に配布するっていうようなかたちを取っています。例えばミルクとか化粧品、お菓子とか、いろんなものがあるんですけど。絵本を借りるとポイントがたまって、そのポイントをためると好きなサンプル品を選んで持って帰れるっていうような仕組みになっているので、それが欲しくてここに来るとか絵本を借りに来るっていう人がいてもいいのかなというふうに思っています。

もちろん、絵本好きな人が絵本を読んでくれるっていうのは一番ありがたいところなんですけど、目的は地域の子どもたちが絵本にふれる機会を増やすっていうことだと思っているので、そうした別の目的があっても、とりあえずここに来て絵本を借りてくれると子どもたちが絵本にふれる機会が増えるんじゃないかなと思うので、興味のない人たちをどうやって巻き込んでいくかっていうのはポイントだと思っています。そのためにこの施設を、何かもっとうまく使うことができないかなというふうに考えています。

②　こどもなーとの保育で大切にしていること

ア：レッジョ・エミリアの100の言葉との出会い

こどもなーとは、レッジョ・インスパイアッドって呼ばれる園だっていうふうにうたっています。

レッジョ・エミリアとの出会いがあって、それが保育を始めるきっかけになったっていうのは間違いないので、そこは重要なポイントかなと思います。先ほど娘のためにアトリエを作るっていうようなお話させていただいたと思うんですけど、そのときに僕は美術の勉強しかしてなくて、教育とか幼児教育とか、そういったことは全く無知だったので、何か知識が必要かなとか、何かしら勉強しなきゃいけないのかなと思って。で、インターネットで美術と幼児教育とかって入れて検索して、出てきたような情報を片っ端から少しずつ見ていってて。その中で、レッジョ・エミリアの100の言葉っていうのに出会ったんです。

ご存じの方もいらっしゃるかなと思いますけど、レッジョ・エミリアの「子どもたちの100の言葉」っていうのを読んだときにすごく腑に落ちるというか、僕がやりたいのはこういった感覚を大切に子どもたちとかかわっていくことなんじゃないかなと思った。そこから興味が出てきたので、レッジョ・エミリアについていろいろ調べだしました。当時は日本語の文献とかもあんまりなくて。

2008年頃はあまり文献もなくて、英語の文献を取り寄せて翻訳をしてみたり、いろんな大学の先生にちょっとお話を聞きに行ったり。レッジョ・エミリア取り入れていますっていわれている幼稚園とか保育園とか、いろいろ見学に行ったりしたんですけど、いろんな方に言われていたのが、レッジョは日本では無理だよ、みたいなことです。それでますますやりたくなったというか、興味を持ったっていうようなかたちですね。

子どもたちの100の言葉

子どもには　百とおりある。

子どもには
百のことば
百の手
百の考え
百の考え方
遊び方や話し方
百いつでも百の
聞き方
驚き方
愛し方
歌ったり

理解するのに　百の喜び
発見するのに　百の世界
発明するのに　百の世界
夢見るのに　百の世界がある
子どもには　百のことばがある
…それからもっともっともっと…

けれど九十九は奪われる
学校や文化が
頭とからだを　ばらばらにする
そして子どもに言う
手を使わずに考えなさい
頭を使わずにやりなさい
話さずに聞きなさい
ふざけずに理解しなさい
愛したり驚いたりは　復活祭とクリスマスだけ
そして子どもに言う
目の前にある世界を発見しなさい
そして百のうち　九十九を奪ってしまう
そして子どもに言う
遊びと仕事
現実と空想
科学と想像
空と大地
道理と夢は
一緒にはならないものだと
つまり百なんかないと言う

子どもはいう
でも　百はある

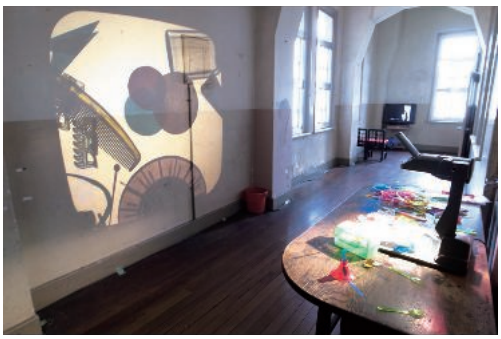
ローリス・マラグッツィ　（田辺敬子　訳）

イ：驚くべき学びの世界展・in京都　実行委員会に加わる

2011. 9. 9~9. 19
驚くべき学びの世界展in京都
和泉氏がポスターデザインを担当した.

レッジョとの出会いの中で大きな出来事の一つだったのが、2011年開催の驚くべき学びの世界展。東京のワタリウム美術館を皮切りに石川、京都、福岡、千葉の柏などを巡回していった展覧会ですけど、この展覧会を京都に呼ぼうっていう話になったときに、実行委員会の立ち上げのときに運よく私も声をかけていただいたので、その実行委員会の中で展覧会のポスターデザインや会場設計、展示のレイアウトをすべて任せていただいて、そのとき初めて実際にレッジョチルドレンの人たちとメールでやり取りをした。

そこで、レッジョの人たちは、子どもたちの作った作品とか記録とかに対してディテールにこだわっているということが分かった。どういうふうに見せるかとか、どういうふうに扱うかっていうところがすごく大切にされているなと思ったんですね。



当時、私は美術制作の仕事をしていたので、美術館とかギャラリーの展示の設営とかっていう仕事もよくやっていたんですが、プロのアーティストの人たちの設営とほぼ同じレベルで子どもたちの作品を取り扱うところがすごく印象的だった。日本の幼稚園とか保育園で子どもたちの作品っていうのが知らない間に先生に勝手に手を加えられていたりとか、展示のために都合よく形を変えられていたりするっていうようなことがあるっていうのも見聞きしていたので、子どもたちが作ったものやその記録に対する意識の違いっていうのはすごく新鮮に感じました。

ウ：こどもなーととレッジョの共通点：アートは目的ではなく手段

この展覧会の中で作品を通して見て感じたのが、レッジョの子どもたちが特別っていうわけではないということ。当時、僕がかかわっていたアトリエの子どもたちもやはり同じようにすごくいい表情をして何かに取り組んでいたり、何かを作り出そうとしていたりする場面をたくさん見ていたので、レッジョの子どもたちが特別なんじゃなくて、目の前にいる子どもたちに気づく大人の視点が大事なんだろう、そこが違うんだろうなっていう印象を受けました。子どもたちの姿をどういうふうに伝えていくのかっていうのもすごく重要なんだということをここで学びました。

そのあと2015年、実際にレッジョ・エミリアへ行く機会があって、先ほど宮里先生もお話しされてた研修ツアーにご一緒させていただいて。空港で優しそうな方がいらっしゃって、僕なんかは1人でどこに行っていいかわかんなかったんで声をかけてみたら、すごく優しく話しかけていただいて、本当に無知で申し訳ないんですが、それが誰かもわからずに、すごく人のよさそうなご夫婦だなと思って仲よくさせていただいていたら(笑)、実は宮里先生だったっていうところで。

実際、現地に行って見たときに感じたのが、やっぱり日本で学んでいるものとか文献とかで見たのとは全然印象が違って。どちらかというと、アートかどうかっていうところは置いといて、子どもたちの権利や市民性、まちづくりというところがすごく僕の中では印象に残った。実際に見てそこで話を聞いてみると、印象が違うんだなっていうふうに思いました。

アートは目的じゃなく手段ですよね。手段みたいなもので、どう生きるかっていうところ、大きなテーマがあって、その問いに対していろんなかたちでかかわっていく、アプローチしていく中にアートが一つあるんだなっていうふうに感じました。それは僕が今まで学んできた美術とかアートとかっていうものをとおして、子どもたちとかかわるうえで大切にしたいと思っている部分とすごく近いなって思ったので、そこを改めて感じることができたっていうのは、すごく意義深い経験だったのかなと今でも思っています。

エ：保育を可視化する中で見えてきたこと

アートが特別なものじゃなくて日常の中にあるものだという意識でかかわっていくと、保育の中でアートがかかわっていく意味が大きなものになるんじゃないかなというふうに思っています。2013年以降、保育を行うようになってから重要視していたのが、保育を可視化するということでした。その中ではレッジョで学んだドキュメンテーションというのも出てくるんですけど、これは初めからあったのではなく、初めは全然違うかたち。ただ、どうやって見せるかっていうところを意識しながらやっていました。

これも保育始めて1年目のときの写真です。私たちが大切にしたいって思ったのが、いわゆる親ばか写真っていう言い方をうちではするんですけど、本当に自分の子どものつもりで、親ばかになったつもりで、その目線で子どものかわいさとか面白さみたいなのをどう伝えていくか、どう記録に残していくかっていうところを大切にしたいと思いました。みん

なで一緒に過ごして、一緒に活動しているような集合写真とか状況証拠写真のようなものじゃなくて、一人一人にスポットを当てる。そして、その子の感情の動きとか活動の様子とかっていうのを記録して、それをできるだけ保護者の方にお伝えすることで、一緒に子どもを育てていくんだよっていうような意識でかかわってもらえたらいいなって思っていました。

③　保護者に向けて発信していること

ア：制作のプロセスを記録することの大切さ

できるだけたくさんの写真を撮って、それをウェブアルバムにアップして、保護者がそれを見れるような状況を作っています。一緒に共有できるようなものにしておくと、保育の様子がわかって、一緒に保育をしていく、子どもを育てていくっていうようなかたちで何か取り組めるんじゃないかなと。

で、その写真にコメントを残したりすると、保護者の方もコメントを返してくださったりとかして。それがドキュメンテーションの始まりになった部分かなというふうに思っています。あともう一つ、制作のプロセスみたいなものを記録することの大切さっていうのに気づかせてもらったことがあります。

これは保育のほうではなく、アトリエのほうに来ていた5歳児の女の子が作った作品なんですけど、これって何かわかりますか。

色がついた紙粘土が紙コップの中に押し込めてあるんですけど、これ、その5歳の女の子が作ったもので、大体、これ作るのに2時間ぐらいかかったんですよね（笑）。で、お母さんがお迎えに来たときにこれを見て、ちょっと怒った感じで、あんた2時間もいてこれしか作ってへんの？みたいな感じでちょっと怒ってたんですよね。

それで、次の写真見せながら説明をしたんですけど。実はこれ、キノコを作るっていうところから始まったんですね。紙粘土に色を混ぜて、自分の納得のいく色とか形になるまで何度も試行錯誤をしながら。で、キノコを作って、僕はこの時点で、あ、キノコを作ったんだ、完成したんだなと思って、ここで写真を撮ってたんですけど、実はこれは全然完成ではなかったみたいで、このあと、粘土べらを使って、この子がこれを小さく切り刻んでいく。で、小さく切り刻んだやつを紙コップの中に入れて詰めて。で、キノコスープっていうのが彼女の完成形だったみたいなんです。

その話をお母さんにして、ただ粘土を詰め込んで終わりっていうわけではないんですって。その前にこういったプロセスがあったんですっていう話をすると、お母さんがちょっと涙ぐみながら、昨日娘さんに手伝ってもらって、キノコのスープを作ったんですって。きっとそれを再現していたんですねっていうことを言われた。子どもたちが作ったものに対する見方や捉え方みたいなのが変わる瞬間だなって思った。

子どもたちが作ったものからすべてを読み取るっていうのは難しいだろうなって思うんですけれど、こういったかたちでプロセスを少しでも知ることができれば、もっと多くのことが読み取れるようになるんじゃないかなと思う。保育の中でたくさん記録をとって、できるだけ保護者の方にお伝えしていくっていうのはこういった目線から見ても、すごく大切なことかなと思うようになりました。

イ：ドキュメンテーションの作成や活用、意義

ドキュメンテーションの中でもいくつかパターンがあって、うちの中では大きく分けて二つあります。

まず一つは、保護者に向けて今日はこういうことしましたよっていう活動報告みたいなもの。ここで大切にしているのは、まず興味を持ってもらうっていうとこですね。どんなにいい内容のものが書いてあったとしても、そこに対して保護者の方が目を向けてくれないとか、読もうと思わないっていうようなものだと、あんまり意味がないと思うので、少しキャッチーなぐらいでもいいかなと思っています。できるだけぱっと見て、それが、今日何したんだろう？っていうのがわかるものにしたいと思ってます。

特にフォーマットが決まっているわけでもないので、その日の日づけとどういう活動をしたかっていうところ、あとは子どもたちのつぶやきとかがあれば、そういうのもちょっと拾いながら、記録として残しています。特にどんな活動をしたときっていうのが決まっているわけではなくて、日常の保育の様子をできるだけそのままお伝えできたらなというふうに考えています。これをお迎えに来られるときに玄関先に掲示することで、そこから話ができるような、今日こんなことしたんですねっていうようなところで話をしてもらえるようになればいいかなと思っています。

掲示したあとはファイルにして誰でも見られるようにして置いています。保護者の方が時間があるときに見て下さったりとか、あとは子どもたちも自分で見ることができるので、もう本当に、0、1、2歳の小さな子らでも結構自分の写真を探したりとか、友達を探したりとか。あとはその写真を見て、このときやったこれがまたやりたいとかっていうようなことも言ってくれたりするので、次の保育計画に活かすうえでもこのドキュメンテーションっていうのはすごく活用できるよなというふうに考えています。

あともう一つは、保育者が振り返りのための資料としての活用です、保育者が自分自身の学びとか同僚間での共有っていうのを目的としていて、全体を網羅するっていうよりは細かいところですね。ほかの人が気づかないような部分にどう気づくか、細部にこだわって事例を読み解く材料にしていくっていうところを大事にしています。

これは「今日の1枚」っていわれるものなんですけど、毎日保育士の先生たちが1人1枚、その日、面白かったこととか、心に残ったことを、その場面を写真1枚ずつピックアップして、そこに対してその場面のことを伝え合うっていうようなことをやっています。これは本当に、初めは、どちらかというとみんなが見て面白いと思える場面とか、すごく目立ったところをみんなピックアップしていたんですけど、そうする

と、複数の先生がいるとかぶってくる事例が出てくるんですよね。

やっていくうちに、みんなその辺の意識が変わってきて、誰も気づかないようなこと、私しかここは見てなかったんじゃないかっていうようなところを面白がって出してくれるようになってきた。5人の先生がいると5人の目があって、それぞれの視点に対して面白がり方が違う。多様な見方ができるようになるとみんなが見落としていたような場面であってもそこに気づくような保育者が出てくるっていうようになってきた。自分自身のためにっていうところではあるんですけど、こういった記録もすごく面白いなと思っています。ただ毎回プリントして、手書きでコメント書くというのはなかなか大変になってきたので、今はLINEやSNSを活用しながら、自分たちのグループで、もう手が空いたときにちょっと入力して送信するっていうようなかたちを取っています。

③　職員のこと・地域のこと

ア：職員の中にアトリエスタがいる

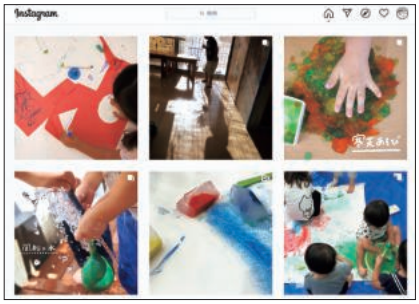
こどもなーとにはアトリエリスタっていう役割の職員が現在5人います。これはレッジョのアトリエリスタとはちょっとニュアンスが違うんですけど、ただ、同じようにアートを専門としていて、保育者と子どもたちをつなぐパイプ役のようなものですね。保育を補完し合う関係というようなふうに私たちは言っていますが、子どもたちが感じていることに、より敏感に気づいたり、子どもたちがうまく伝えられない部分を可視化したり言語化したりするお手伝いをする役割かなと思っています。そうすることで子どもたちの活動を、ほかの保育者とか保護者の方とかと共有することができるようになるっていうのが目的です。

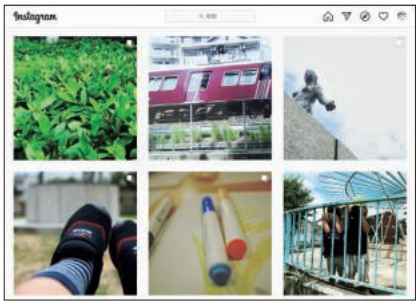
毎月、この写真のようにアトリエリスタ会議っていうのを開いて、各園でどのような活動が行われているかっていうのを共有したり、事例の共有や素材の研究もここでやっているので、こういったものをこういうふうに使ってみたら面白かったよというようなかたちで情報の共有をしています。

あとは、ドキュメンテーションを使って、これは対保護者だけじゃなくて、地域の方とか、こどもなーとの保育に興味を持ってくださる方に見ていただけるように、毎年「こどもなーとの保育展」っていうのを開催しています。これは近くの大学のギャラリーをお借りして、作品展ではなくて記録を展示してっていうようなかたちですね。毎年ちょっとずつテーマを変えながら開催しています。これはいわゆる作品展ではなくて、子どもたちの活動の痕跡であったりとか、そのときの写真とか記録とかっていうのを交えながら、子どもたちがどのように感じて、考えて日々過ごしているのか、その保育の様子みたいなものが垣間見えるようなものになればいいなと思いながら展示をしています。

そこでは毎年、テーマに合わせたシンポジウムが開催されて、保護者や地域の方とか、保育関係者などがこういったかたちで参加してくれます。2019年2月には宮里先生にもお越しいただいて、一緒にシンポジウムに登壇していただきました。昨年は残念ながら展示ができなくて、コロナの影響でオンラインでの開催っていうかたちになったので、今からお見せするのはおととしの展示の様子になるんですけど、何となく雰囲気が伝わるといいかなと思います。

イ：こどもなーと保育展に合わせて冊子を作り保護者に配布





写真の記録がメインにはなってくるんですけど、そこで保育者はどういうねらいを持ってそこにかかわっていたのかとか、子どもたちが気づいたことから私たちは何を読み取っていったのかというところもお見せすることができれば保護者にも伝わりやすいし、地域の方にもこの園はこんなことやっているんだなっていうことが伝わるといいのかなというふうに思っています。そこで毎年こどもなーとの保育展に合わせて、その年の活動をダイジェストにした冊子とかを作って、それも保護者に配布しています。

あとはInstagramとかFacebookとかも活用しながら、子どもたちの保育の様子っていうのを少しずつ発信しています。保護者にはパスワードの制限のかかった別のウェブアルバムがあるのでもっとたくさん見ることはできるんですけど、外部に発信しているのはそんなに多くはないですけど、こういったかたちで少しずつ発信しています。

子どもたちがカメラを持って外に出て子どもたちが撮った写真があります。それを上げていくためのアカウントで、子どもたち専用のアカウントです。子どもたちの視点とかがわかってすごく面白いなというふうに思っています。

ウ：町の中で保育ができるというメリット

うちの園っていうのは小規模園で園庭とかがないので、普段、天気のいい日は基本的に外に出かけます。近隣の公園であったり河川敷であったり。あとはもう、ただ散歩して、体動かすっていうのが目的のときももちろんあります。これは、子どもたちがこの園の中だけで過ごすんじゃなくて、街の中でともにある、この街で生きている、生活しているんだっていうのを実感できるいい機会なんじゃないかなと思っているので、園庭がないっていうのはデメリットかもしれませんけど、街の中で保育ができるっていうの

はメリットだと思って、積極的に地域の方と交流しながら過ごしています。

先ほどお見せした、こどもなーとの保育展とかを見てくださって、興味を持ってくださる地域の方も結構いらっしゃるので、そこで声かけていただいて、地域と一緒に行うようなイベントだったりとか、近隣の畑のようなところをお借りして、一緒にサツマイモを育てて収穫体験をしたりしました。

これは保育園の近隣にある神社で、毎年、年末年始になると子どもたちが作ったものを奉納して、それを展示してくれるっていうようなことがここ3年ぐらいですけどあるので、しめ縄を作ったりとか、だるまを作ったりして、それを神社に奉納します。そのあと年末年始の期間ずっと展示してくれるので、それを見に保護者の方と一緒に神社を訪れたりとか、これ、自分たちで作ったんだよというような話をしてくれたりするみたいです。

これは大きな絵馬ですね。絵馬も奉納しました。こうやって自分たちが作ったものやかかわったものが実際に街の中にあるっていうことを子どもたちの生活空間の中に落とし込んでいけるっていうのはとても重要なことなのかなと思っているので、こういった活動は今後も継続していきたいなと思っています。

散歩の道中に出会う人たちともいつの間にか仲よくなって、見守ってくれていたりするようになります。ハロウィーンやクリスマスとか、そういったイベント事になると、一緒に子どもたちと楽しんでくれたりというようなことが増えてきています。

園の子どもたちだけじゃなく、うちの園に通ってない子どもたちも一緒に遊べるような企画を時々作っています。これは河川敷で大きなシャボン玉を作るっていうワークショップをやったときの写真です。園に来ている子どもや保護者だけじゃなく、地域の親子に向けて何か、もっとたくさんかかわりながらやっていくことができるんじゃないかなということを考えながら、いろいろと企画しています。

エ：離職率を下げて、みんなが楽しく働けるような職場にしていくために

こどもなーとの保育に共感してもらって、それを一緒に作り上げていくためには保育士さんたちの力ってすごく大事だと思っていて、保育士の採用とか育成っていうところはすごく大切に考えています。

新卒採用者（14名）
2013年　1名
2015年　3名
2016年　1名
2017年　2名
2018年　5名
2020年　1名
2021年　1名

小規模の園って最近でやっと市民権を得てきたかなっていうぐらいなんですけど、初めのうちは、もう養成校の先生たちも小規模の保育園って何？みたいな感じで、なかなかそこに対して採用希望者が多くくるっていうようなことは少なかったんでね。

これが弊社の新卒採用の数なんですけど、2013年に保育を始めだしてからの数で、14名の方の新卒採用をしたんですね。そのうちこの2016年の1名、ちょっとグレーになっているこの子だけ、残念ながら昨年ちょっと退職してし

まったんですけど、それ以外の13名は、今も継続して勤務してくれています。保育者の離職率が高いっていう状況、3年以内に新卒の子が辞める子が多いっていわれている中で、離職率を下げてみんなが楽しく働けるような職場にしていくっていうのが、園の文化の醸成につながるかと思っています。

うちは決して給料が高いわけでもないですし、近隣の大きな園に比べると多分中の下ぐらいじゃないかなと思っているので、あまり金銭的な部分での魅力っていうのはないとは思うんです。ただ働き方をしっかりと見直すというところ、保育業界の中で当たり前になっているような持ち帰りの仕事であったりとか、よくわからないサービス残業みたいなものとか、そういったものは徹底して排除している。あとは配置基準よりも少し多めに職員を配置していくことで、急なイレギュラーとかが起きたときに、例えば職員のお子さんが発熱でとか、けがしましたとかってなったときにも、すぐに帰れるような、早退とかも欠勤とかも当日朝から今日、ちょっとうちの子、熱があるんで休みますとかって言ってもらっても大丈夫なような環境っていうのは、作りたいなと思っています。

実際に私が保育ママの実習で、公立の保育園に実習に1カ月、行っていたときにあったんですが、保育士の先生が別の園にお子さんを預けていて、その子どもさんが階段から落ちて頭から出血して救急車で病院に運ばれましたって連絡が来たのにもかかわらず、次の先生が来るまで動けないからって結局夕方までその先生は勤務されていたのですね。それを見ていて僕は当時、実習生だったので僕の立場からは何も言えないんですけど、やっぱりそれはおかしいんじゃないかなってずっと思っていました。だから、自分で園を作るときはそういったところしっかりと配慮しながら、自分の子どもをまず最優先にできるような働き方ができる会社にしようっていうふうに考えました。

オ：若い職員が自分たちの保育について自信を持って語れるような場を作りたい

子どもたちに対してと同じようにやっぱり保育者に対しても何か上から教えるっていうんじゃなくて、共に学ぶっていうような姿勢を大事に取っていくことができればいいなというふうに思っています。

これはこどもなーとの保育展でやっていたシンポジウムのときの写真なんですけど、これが2年目の保育士さんで、こっちは1年目の保育士さんなんですけど、できるだけ若手の職員が自分たちの保育について自信を持って語れるような場っていうのを作りたいなというふうに思っています。

台湾にあるレッジョ・インスパイアッドの幼稚園は、3年目の保育士が1週間研修に行きました。ここで学ぶだけじゃなくて、こどもなーとでどういった保育をしているかっていうのを発表してきたりとか、これも多分3年目の別の職員ですけど、香港で行われた香港マカオでこどもなーとの事例っていうのを発表する機会をいただいたので、そこに行ってもらいました。こうやって外に発信する、自分たちの保育に対して発信することで自信を深めることにもなると思う

し、やはり胸を張って自分たちがこういう保育をしているんだっていうのを、若手の職員も、ベテランの職員も自信を持ってちゃんと語れるような場っていうのをできるだけ作っていきたいなと思っています。そうすることで保育に対して、フレッシュな視点で職員が見ている、そういった事例などっていうのは、きっとベテランの職員にとっても学ぶべきことたくさんあるんじゃないかなと思うし、そうやってお互いが高め合っていけるような存在になればいいんじゃないかなと考えています。

若手の職員も園内研修で、ほかの人に遠慮したりせずに発言しやすいような場作りっていうのは考えています。こどもなーとの園内研修で、こういったことを大切にしたいなと思っているのが、できるだけ具体的な実践事例を元に考えていくっていうこと。写真記録とかドキュメンテーションを活用する。正解を探さない、自分だったらどうするのか、それは何でなのか、お互いの意見を尊重する、他者の視点を知るとか共有するっていうとこですね。そこを大切にしながら園内研修をしていくと、若手の職員でも比較的発言しやすいような場面になるのかなと思っています。

（２）ブレイクアウトルームでの対話＋共有

①ブレイクアウトルームでの対話

テーマ
「こどもなーとをもっと良くするためには？」

Room 1　　運営側の視点で

Room 2　　現場で働く保育者の視点で

・時間：15分間
・メンバー：５、６名ずつ　２グループ
・投げかけられたテーマのもとに、語り合う。
・語り合いには和泉先生も参加。

②グループに分かれて語り合った内容の共有

宮里　和泉さん、あっという間でしたね。

和泉　はい。あっという間でした。

宮里　あっという間でしたけれど（笑）、一応話されてたみたいだから、どうしましょう。

和泉　じゃあ、ルーム1のほうからどんなお話があったのかっていうのを聞かしていただけるとありがたいです。あと、ちょっとさっきのルーム2のほうでいくつか質問があったので、そちらもあとでお答えしようかなとは思います。

宮里　そうですね。じゃあ、ルーム1からお願いします。

ア：ルーム１の語り合い報告：小規模ならではの良さを手放さない

まず出てきた話としては「小規模ならではの良さ」ということ。こどもなーとさんの良さは、大規模な園にしてしまったら良さは薄れるんじゃないかっていう話になりました。一方で、卒園した子、今の状態

だと3歳児さん以降とか、ゆくゆくは小学生になった子とかも含めて、卒園した子とのかかわりをきちんと持っていけたらなっていう話が大きく出ました。小規模の良さを保ったまま、どう3歳児さんとかを受け入れるようにしていけるかという話をしていました。

出た案としては（笑）、思いつきみたいなものとして、コテージみたいな小さい園舎を何個かぽんぽんと造って、そこ全体で5歳児さんまでみんな入れるみたいな、保育園といっていいのか、何といっていいのかはわからないんですけど（笑）。そういう場所が作れたら、少人数でやれる良さと5歳児さんまでいられるっていうこと、両方兼ね備えられるかなというお話をしました。

あとは、森のようちえんが自主保育から始めているところも結構あるというお話を伺いまして、なので、もしそういうことをやりたいっていう保護者さんとかがいれば自主保育から始めてもいいんじゃないかという話とか、森のようちえんが、全国のネットワーク連盟っていうのがあると思うんですけど、そういう連盟みたいな名前があることによって市民権を得やすかったりとか、許可が下りやすかったりとかそういうことがあるのであれば、『こどもなーと連盟』みたいなものを作ってもいいのかなというお話をしておりました。あとは質問に近いんですけど、アトリエリスタの方って美術のプロとして入られると思うんですけど、その方が保育のプロとして入ってくる保育者の方とどうコラボしていって関係を作っているのかを知りたいです。

＜ルーム１の語り合いの報告を受けて＞

宮里　いろんな意見出ていましたね。熱心に！どうですか、和泉さん（笑）。

和泉　いや、ありがたいです。もう皆さん、運営サイドに入っていただきたいですね（笑）。

宮里　ルーム１の語り合いの中で印象的なのが「良さっていうのを手放さない」というところ。良さを手放さず、良さをどうつないで展開を考えるかっていう話があって、それって一つのマネジメントのコツのように思いました。

和泉　そうですね。

宮里　アトリエスタと保育者との関係についての質問に答えていただけますか？

和泉　アトリエスタも一応、美術の専門家というかたちなんですけど、美術だけをやるわけではないです。うちの中では園の中で子どもたちとかかわってもらう「変な大人」っていう位置づけなので、普通に保育の中に入って子どもたちと一緒に過ごすことが常態化しています。いつもアートをやっているわけではないので、この人はアトリエリスタ？保育者？っていうのは、外から見ても多分わからないんじゃないかなと思います。一緒に子どもたちを育てていく仲間というような関係性です。答えになっていますかね。

宮里　ドキュメンテーションや掲示物の質、視点、シャープさ、その辺りでアトリエスタの専門性を感じるのですが、それはまたお時間があったらで、では、ルーム２の報告をお願いします。

イ：ルーム２の語り合い報告：和泉先生との対話が中心

私たちの部屋には和泉先生が来てくださったので、質問に答えていただく、という感じになりました。その内容について私のほうで記録させていただきました。それについて報告します。現場で働く保育者の視点でということなんですけども、まず最初に遠くから来た人に対する、保育者に対する社宅の手当てがあるといいなってことですが、ありますっていうお話でした。

有給休暇は時間帯単位で取れると働き方改革になるのではというのは小規模保育園で働いている方の話でした。近くの福祉施設が作業所でアート活動をしているっていうところで、そこでは自由に絵の具にアクセスできるので園ではできないってことだったんですけれども、絵の具でどろどろになると、子どもたちがあちこち絵の具を使うと、保育士からすると一日絵の具を洗い流す活動になってしまうんだけれども、そこでちょっと疲労感っていうか、そういったものに対してどのようにお考えになるのかってことですね。

これについてはほかの特別支援の学校で働いていらっしゃる方も、絵の具を自由に使ってよいとすると使用量が大量になるし掃除が大変になってしまう。絵の具をぽんと置いておくだけではないと思うので、どんなふうに絵の具を出すと心穏やかに掃除ができるのかっていう話がありました。

あと、写真を撮りたいと思うときに撮れないとか、保育者一人につき1台あればいいなっていうお話があり、散歩に行くと非常勤が写真を撮る係になってしまうんだけれども、保育しているのと写真を撮るのとの両立が難しい、どのように専門的な写真を撮ることができるのかとかですね。あと、一人一人の子の活動をスマホで撮ると子どもの動きが止まるんだけれども、こどもなーとさんではどのようにしているのかってことですね。一緒になったときにお話をしていただくということで、和泉先生、いかがでしょうか。

＜ルーム２の語り合いの報告を受けて和泉先生、さらに語る＞

僕がいたからだと思いますけど（笑）、たくさん質問もいただきました。うちの職員もおんなじこと言っているなと思ったのは、やはり一人1台カメラが欲しいっていうことはうちの職員も言っています。

＊カメラのこと・撮られていることを意識しない写し方

今、実際に各園に、小規模なので、19人とかに対してデジカメが2台と、あと、iPhoneとかiPadとかっていう園用のものがあるので、それを使って記録を取ってもらってはいるんですけど、やはり一人1台カメラ欲しいなっていうことは言われます。

カメラの流れでいくと、子どもたちがやっぱり写真を撮られるときに意識してしまうとか、活動が止まってしまうっていうのは、避けたい。そのためにうちがやっているのは、カメラを構えないっていうとこですね。ファインダーをのぞいたりとか、構えたりしない。もう全然ノーファインダーで、子どもたちの目線とかにスマホやカメラを持っていって、カメラをのぞかずに写真を撮っていくと、意外と写真を撮られているって意識がなくなる。子どもたちは気にしないんですけど、大人がこういうふうに構えてしまうと何かそれに対してやはり子どもたちも意識をしてしまうっていうのがあるのかなと思うので、写真は構えずにノーファインダーで撮るっていうのは徹底しています。もちろん変な写真が撮れちゃうこともあるけど、デジタルなので、それは消せばいいだけなので、その中できちんと記録できた写真だけを使うっていうかたちにしています。

＊絵の具のこと

あと絵の具ですね。絵の具の問題とかなんですけど、うちで主に使ってるのは不易（フエキ）糊さんが出してるゆびえのぐです。ぺんてるさんもゆびえのぐあるんですけど、不易糊さんの方が一番落ちがいいんですね。発色がとか、塗り心地がとかじゃなくて、やはり掃除とか、あとのメンテナンスのことを考えて、一番落ちやすい絵の具を使っています。

大きなボトルで、これぐらいの、800だったかな、ボトルで入っているので、それを子どもたちの前にぽんぽんと適当に、自分たちが取れるとこに置いとくんです。初めはやはり使いすぎたりとか、もうぐちょぐちょになったりするんですけど、ある程度使っていくと、子どもたちが自分でそれをコントロールでき

るようにもなるので、1歳、2歳の子でも使いすぎて無くなったら次使えないとか、また次、新しいのを買ってもらうまで入ってこないっていうのも理解しているので、そんなに使ったらなくなるよとかって、子どもたちの中で言っていたりすることもあるし、その色とその色混ぜないでとか、なので、意外と使い方に関しては子どもに任せています。初めは大変ですけど次第に慣れてくるので、変にこちらが制限するよりは好きに使ってもらう環境の中で、いかに僕らの労力を減らすかっていうところを大事にするかのがいいのかな。

＊絵の具はできたら外で

室内で絵の具遊びするよりも、テラスとか、外で活動することのほうが多いですね。そうすると、そこに紙を広げて絵の具で遊んだりとか、窓や体に絵の具を塗って遊んでも、夏場であればもう水ぶっかけたら終わりっていうような、そうすると、先ほど言われていたような絵の具を落としたりするのだけで一日疲弊してしまうっていうようなことは避けられるのかなというふうに思っています。

ウ：語り合いの最後にもう少し語り合う

宮里　時間があっという間なんですけれども、和泉さんと打ち合わせで話したときに「他の園だとちゃんとやっていけないような人はこどもなーとにくるといいよ」と呼びかけているという話を聞いて、そのあたり聞きたいです。

和泉　ざっくり説明しますと、養成校とかにお願いするときに他の園で採用されないような子、全然言うこと聞かないような子がいたらうちに紹介してくださいって言っているんです。さっき挙げてた新卒採用者14人がほとんどそういう子に当たるんですけど。何で？って言われるんですけど、子どもたちにどんな大人になってほしいかとか、どういう成長をしてほしいかって考えたときに、「よく言うことを聞く子」ではないんですよね。

宮里　（笑）

和泉　人の言うことを聞く子よりも、自分で考えて自分で行動できる子になってほしいなと思っている。だから、先生の言うことをなかなか聞かないような学生は、きっと自分なりの考えがあって他の人の言うことを聞くのが嫌なんじゃないかなというふうに思っているので、その人たちと話をして、僕はこういうふうに考えていてこういう保育をしたいと思っているんだけど、どう？って聞く。すると意外とみんな、それだったらやってみたいですと言ってきてくれる。保育の中で大切にしている部分は、同じように保育者間とか、大人同士のかかわりの中でも大切にしたいなと思っているので。僕自身が多分、ちゃんとした会社で働いたこともないし、社会の枠組みの中でちゃんと機能できるのかって言われると自信がないので、自分自身を肯定するためにも、そういう人たちも働いてもいいんだよっていう場所があるほうがいいのかなと思っています。

宮里　とっても面白いし、それがこどもなーとを、こどもなーとらしくしてるのかなと思います。新しい価値観っていうか、独自の価値観だからいいなって思います。

和泉　ありがとうございます。

宮里　時間が過ぎちゃっているんです。どうしようかな。実は和泉さんに一個話したいことがあって、こんなに時間がないのに、私に2分だけください。

和泉　僕は大丈夫です。はい（笑）。

宮里　では、少し話をさせてください。私は、大学の授業を考える以上に保育を考えるのが好きすぎて、よく保育に参加しています。今日も4歳クラスの遠足に一緒に行ってきました。遠足といってもコロナなのでキャンパス内を散策という形です。いつもの場所だけど面白くするために「時間余っちゃうぞ、どうしよう大作戦」（笑）っていうのを保育者同士の合言葉にしたんです。

普通は遠足と言ったら早く出発をするんだけれど、今回はとにかく引き延ばし作戦。22人の子たちが２グループに分かれて行動するそのグループ分けも、ぱっと分けずに一人ずつくじを引いていくというやり方にしたらこれでいちいち長くなっていく（笑）。

手早くする、速やかに行動するっていうのとは全く逆の方向の、できるだけ引き伸ばすっていうやり方をしていたら、せかせかした気持ちが抜けて穏やかな気分になっていったんです。

そんな風にして二つのグループに分かれて出発したら高校の体育祭の予行をやっているところに遭遇。ゆっくり観戦して楽しみました。「引き延ばし作戦」においては、出会いが貴重なので、その一つ一つを大事にしていくので幸せな気分になるみたいです。

立ち寄りポイントの一つにしたのが附属小学校の岩石園。石が地味に並んでいるだけなんだけれど是非これを見ようじゃないかと、子どもたちに投げかけてみました。石を見ていたら描きたくなる人いるかもねとスケッチセットを用意したんですよ。そしたら、石を描くだけではなくて、草や虫を描いたり、サクラは咲いてないけれどサクラを描く人が出てきたりして楽しい時間になりました。

この遠足は「遠足」という枠がパーン！とはずれたみたいな気がしました。いつもとは違う気分で楽しさを味わいながらゆっくり過ごしたらいくらでも楽しみが見つかって驚きました。

それから、外で絵を描くってすてきだなと思ったので、今日和泉さんに会えるのでお話ししたくなりました。こどもなーとの実践の中で霧吹きを1人1つ持って散歩するとか、不思議なアプローチで外を歩くっていうのをされていたんですけれども、そんな可能性を感じたりしました。

和泉　岩石園の話、面白いですよね。僕らもよく散歩に行くとき、さっき、霧吹きもおっしゃってくれていたんですけど、透明のフィルムとクレヨンとか持っていく。そうすると、どこでも座るときにとりあえず透明のフィルムひいて、そこに座ってフィルムの上から地面を描くみたいなことを子どもたちが結構やっていたりする。

宮里　木の下で描いていると、木の葉の影が紙の上に映ったりする。面白いですね。外ってすごい可能性がありますね。

和泉　そうですね。

宮里　もう終わらなきゃいけないんですが、もっと聞いたり話したりしたくなります。今日は本当にありがとうございました。またいろいろ教えてください。ありがとうございました。

和泉　こちらこそありがとうございます。

和泉誠先生の語りから捉えられる

保育マネジメントの実際

＊まず行動し次第に形ができていく。人と人のつながりを大切にする。

「かわいい娘が生まれたから」という理由で刻まれたはじめの一歩。「出張美術教室」というかたち、そしてアトリエへ。できることをできる形で、と歩みを進めていくうちに「もっとやって」と言われる。保育ママの研修に参加して「保育ママっていう名称になってるけどママじゃない」ということで注目を浴びる。理解者も現れて、いくつもの園が生まれていく。対話的で応答的な在り方が、マネジメントの根底にあるように思えます。

＊「子ども」と「もの」と「アート」。園名に現れている保育スタイル。

外国人のアーティストにアトリエの上の部屋を住居として貸して、週1回以上必ずアトリエの子どもたちと遊ぶ時間を作るというルールを設定したという。それぞれの母国語とボディランゲージが飛び交うアートな時間の豊かさを想像する。多様性や創造性を大事にする姿勢が貫かれている。

＊アートは目的ではなく手段。「子どもたちの姿」が見えてくる、それを伝える。

レッジョ・エミリアの実践に触れ「目の前にいる子どもたちに気づく大人の視点」の大切さを実感。子どもの姿が見えてくることに注目。「5人の保育者がいると5人の目があって面白がり方が違う。多様な見方ができるようになるとみんなが見落としていたような場面であってもそこに気づく保育者が出てくる」と言う。多様であることを大事にする姿勢がここにも見られる。

＊若い職員が自分たちの保育について自信を持って語れるような場を作りたい！

子どもたちに対してと同じように保育者に対しても共に学ぶ姿勢を大事にしたい。
「こどもなーとの保育展」でも1、2年目の保育士が話す機会をつくる。写真記録とかドキュメンテーションを活用する。正解を探さない、自分だったらどうするのかを考え互いの意見を尊重し合うことを大切にしながら園内研修をしていくと、若手の職員でも比較的発言しやすいような場面になっていく。

Ⅳ　プロジェクト成果の記録（2021.4-2022.9）

各成果について右欄に概要を記した。

論文・著書

Mitsuhashi, M., & Gyobu, I. , 2021, How Did the Young Children Encounter the Japanese Urban Landscape?: A Study on Emergent Pedagogy for Sustainability Transformation. Sustainability, 13 (17), 9723 pp. 1-21.	近年、世界的に保育学においてもSDGsが問われるようになってきている。本論文では、都市部にすむ子どもたちが、水の源流地点まで足を運び、また源流から川の流れに、海まで至る、自然の循環を発見し、探究する保育実践を持続可能な変容の教育学の観点から「風景」をテーマに明らかにした。
岡南愛梨・刑部育子，2022，1・2歳児クラスにおける仲間との遊びの変化――ビデオ観察ツールCAVSceneにおける観察者の遊びの切り出しに着目して.『質的心理学研究』，日本質的心理学会，21，pp.34-50.	刑部が開発者となっているビデオ観察ツールCAVSceneの記録操作の痕跡からこども園の1・2歳児クラスにおける子どもの仲間との遊びの変化を分析した。その結果、1・2歳児の子どもの遊び方や相互作用には変化が見られ、遊びの持続性と多様なかかわりが生まれることが明らかになった。
髙谷実穂・刑部育子，2022，フィンランドの保育者による子どもの主体性のとらえ方とその尊重―フィンランドのECECの現場の記録から―.『お茶の水女子大学こども学研究紀要』，お茶の水女子大学 子ども学研究会，10，pp.97-107.	近年、日本の保育では「主体性」という言葉が頻繁に謳われている。しかし、フィンランドの「主体性」とは日本で言われる「主体性」とは同じなのか、異なるのか。本研究では、フィンランドの現場の実践の記録から、改めて「主体性」のとらえ方と子どもの尊重とは具体的にどのようなことなのかを論じた。
宮里暁美，2022,「ツクル×アソブ×イノチ」と出会える場所―子どもたちが過ごす場所に必要なこと」,『発達』171，ミネルヴァ書房，pp. 9-15.	特集「子どもと屋外環境：主体的なあそび、学び、育ちを支える」をテーマとして、お茶の水女子大学こども園での実践をもとに、存分に遊ぶ体験を通し創り出す喜びや変化する命と出会う体験が得られることが大切であるということを論じた。

学会発表・招待講演

宮里暁美，2021,「日中の垣根を越えて保育・幼児教育・子育てについて学びあうVol.1子どもへの食育」，日本×中国　保育・子育てシンポジウム）中日幼児教育交流協会，中国・日本，オンライン，2021年2月28日.	日本と中国の研究者や実践者が共に学び合う機会として設定され、「食育」をテーマとした回に登壇し「食は喜びである」「食は文化である」「食は人と人をつなぐ」ことについて、実践例をもとに提案した。

菊地知子・中澤智子・森藤郁子・元岡展久，2021，「現場における同僚性を考える―子どもも大人も育ち合う保育の場をめざして―」，日本保育学会第74大会，富山・富山大学，オンライン，2021年5月15-16日，（シンポジウム）.	2019年シンポジウムで「語り合うように書き合う記録」というタイトルの元、「記録するということ」の対話可能性を考えようとした前回を受け、そもそも応答的対話的でありたい「保育」そのものについて、“同僚性”という観点から改めて問い直し、検討した。
刑部育子・宮里暁美・内海緒香・粂原淳子・山﨑寛恵，2021，「夕方の保育の探究: 認定こども園における教育標準時間外のカリキュラムの検討を通して」，日本保育学会第74大会，富山・富山大学，オンライン，2021年5月15-16日，（シンポジウム）.	本シンポジウムでは文京区立お茶の水女子大学こども園の夕方の保育の実践、教育標準時間外のカリキュラムについての全国調査、本研究をきっかけにお茶大こども園と交流を深め、標準時間外のカリキュラムについて実践を考えてこられた千代田区立ふじみこども園の実践について、対談を通して夕方の保育のカリキュラムについて議論をした。
内海緒香・宮里暁美・刑部育子・山﨑寛恵・杉山沙旺美，2021，「夕方の保育の探究: 認定こども園における教育標準時間外の保育に関する調査報告」，日本保育学会第74大会，富山・富山大学，オンライン，2021年5月15-16日，（ポスター発表）.	夕方の保育の実態を明らかにするため全国の認定こども園における、教育時間後の保育の課題とその良さや気づきを調べた。夕方の保育の困難は、人員配置、場所の確保、保育実践の課題、家庭との関係などが取り上げられていた。様々な工夫を通じて、少人数での保育の良さや、家庭との連携・保護者理解を深める必要性に気づいたことが指摘された。
小玉亮子，2021，「日本における幼小接続の展開と課題–お茶の水女子大学附属学校園の実践から」，浙江省幼小接続に関するシンポジウム，中国・浙江省，オンライン，2021年5月28日，（招待講演）.	中国で注目を集める幼小接続実践について、お茶の水女子大学の附属小学校と附属幼稚園の共同研究の特徴が、幼稚園を小学校の準備教育とするのではなく、協働的研究を通じて、相互理解を深めてきたことを説明した。
宮里暁美，2021，「子どもとSDGs」第12回ポピンズ国際幼児教育学シンポジウムSDGs for Children ～ SDGsが広げる子どもの選択肢～」，アメリカ・日本，オンライン，2021年6月27日.	ハーバード教育大学院附属研究機関Veronica教授による基調講演やポピンズの発表を受け、Veronica教授、秋田喜代美教授と共に登壇した。直接体験・問いをもつこと・創る営みのそばにいること・食は化学でありアート、喜びであることについて提案した。
内海緒香・宮里暁美・辻谷真知子・山下智子・内野公恵，2021，「生命とのつながりを育む移動動物園における保育の環境設定と子どもの学びの評価」，日本子ども学会議第17回大会，滋賀・滋賀県立大学，2021年10月23-24日，（ポスター発表）.	移動動物園における認定こども園の園児と保育者の動物とのふれあい活動を観察した。環境評価『5つの視点』を参照し事例を分析した結果、“ウェルビーイング”・“深い観察”・“共感的理解”・“創造性”・“コミュニティ形成”の要素が抽出された。

岡南愛梨・杉山沙旺美・刑部育子・宮里暁美，2022，「まち」で暮らしている子どもたち―お茶の水女子大学の教育環境と子どもたちのかかわりから―（1），三菱UFJ環境財団寄附講義2021年度シンポジウム「お茶大×SDGs」，オンライン，2022年1月31日，（ポスター発表）．	本発表は、お茶大こども園の子どもたちが、こども園のみならず、お茶大の敷地全体をまちと見立ててみると、そこに暮らしがあり、多様な人々が行き交い、出会う、豊かなSDGsの教育環境となりうることが見えてきた。
杉山沙旺美・岡南愛梨・刑部育子・宮里暁美，2022，「まち」で暮らしている子どもたち―お茶の水女子大学の教育環境と子どもたちのかかわりから―（2），三菱UFJ環境財団寄附講義2021年度シンポジウム「お茶大×SDGs」，オンライン，2022年1月31日，（ポスター発表）．	本発表（1）につづき、SDGsの17のゴールのうちの、4「質の高い教育をみんなに」にも当てはまるが、この研究では、お茶大の環境が11「すみ続けられるまちづくりを」していることが4「質の高い教育をみんなに」かかわることが見えてきた。
内海緒香・川辺尚子・松尾杏菜，2022，「保育環境を評価する（1）『5つの視点』創案と視点「社会が生まれている」について」，日本保育学会第75回大会，千葉・聖徳大学，オンライン，2022年5月14-15日，（ポスター発表）．	環境評価『5つの視点』は、イノベーションを志向するエマージェント・カリキュラムの考え方に基づき、保育者たちのナラティブから生み出された評価の枠組みとして考案された。本研究では、保育研修における活用と5番目の視点である「社会が生まれているかな」が提起する問題および課題について論じた。
小玉亮子・宮里暁美，2022，「保育のグランドデザインを考える1」，日本保育学会第75回大会，千葉・聖徳大学，オンライン，2022年5月14-15日，（口頭発表）．	お茶の水女子大学こども園の取り組みをその開設の時点から明らかにし、特に、「つながる」をキーワードにこども園のグランドデザインが示され、発展してきたことを論じた共同研究の成果。
高橋陽子・小玉亮子，2022，「保育のグランドデザインを考える2」，日本保育学会第75回大会，千葉・聖徳大学，オンライン，2022年5月14-15日，（口頭発表）．	創立145年の歴史を持つお茶の水女子大学附属幼稚園の歴史的経緯をふまえて、○教育課程の変遷○令和元年の教育目標の改訂（6つの目標から3つの願いへ）○保護者との対話を重視していることを論じ、グランドデザインにおいて「大切にする」をキーワードに園の生活をすすめていることを示した。
松尾杏菜・宮里暁美・内海緒香・川辺尚子，2022，「保育環境を評価する（2）「社会が生まれている」という視点に着目して」，日本保育学会第75回大会，千葉・聖徳大学，オンライン，2022年5月14-15日，（ポスター発表）．	環境評価『5つの視点』における「社会」を実践事例の中に見出すことを試みた。（1）場面における社会の様相と（2）社会が生まれるための要素をストーリーライン上に示し、人間関係を視覚的に把握しながら考察を行った結果、異なる意見や考えを持つ第三者の存在の重要性が明らかとなった。

宮里暁美・浜口順子・内海緒香・辻谷真知子・松島のり子，2022,「明日の保育を拓く保育マネジメントの在り方（1）～地域・社会に開かれた園運営者の語りから捉えられたこと～」，日本保育学会第75回大会，千葉・聖徳大学，オンライン，2022年5月14-15日，（ポスター発表）.	保育マネジメントとは「視野の広がりの中でよりよい保育的価値を追究するダイナミクスの創造」である、という考えに立ち、P事業体の経営者A氏の語りを手がかりとして、保育マネジメント展開される過程の特徴を、当事者本人が物語る内容、言説から検討した。
中澤智子・森藤郁子・浦木智子・刑部育子・菊地知子，2022,「現場における同僚性を考える(2)―記録（ポートフォリオ）の過程を記録してみる―」，日本保育学会第75大会，千葉・聖徳大学，オンライン，2022年5月14-15日，（シンポジウム）.	ポートフォリオの作成過程を可視化・言語化する中で、同僚と共に作っていくポートフォリオを自分の中にどのように位置づけたり意味づけたりしているのか、それが自身の保育やナーサリーの保育にどうつながっているかを検討した。
宮里暁美，2022,「SDGsを実践する力を育む教育者の役割」，第13回ポピンズ国際乳幼児教育学シンポジウムSDGs for Children ～ SDGsが広げる子どもの選択肢～ ,アメリカ・日本，オンライン，2022年6月25日.	2021年と同様のメンバーで「教育者の役割」について論議した。SDGs目標5「ジェンダー平等を実現しよう」をテーマとして論議する中で「差別しない」「違いを尊重し合う」「生命のつながりへの眼差し」について提案した。
宮里暁美，2022,「預かり保育の在り方について」，令和4年度教育研究大会分科会講師，東京都私立幼稚園教育研修会，2022年7月26日.	都内私立幼稚園の教員の学びの場である教育研究大会の分科会で、預かり保育（教育標準時間外の保育）の在り方について、2019年～2022年まで取り組んだ「夕方の保育」の研究成果をもとに助言した。
宮里暁美，2022,「日本の0-3歳児保育の経験～保育人材の育成戦略、保育のシステム～」，浙江省予防医学学会の学術会議（Academic Conference on Advances in Child Health Care in Zhejiang Province），中国，オンライン，2022年8月10日.	乳児保育のニーズが高まってきている中国より、日本の0～3歳児保育の在り方についての情報を得たいという要請を受け実施した。保育所保育指針や幼稚園教育要領で重要視されている内容を基盤としお茶の水女子大学こども園の実践例をもとに講話した。
Kodama,R., Takahashi,Y. & Sato, H., 2022, “Documentation in Japan: Focusing on the significance of dialogue,” The 30th EECERA Annual Conference, August 23-26, 2022, Glasgow, U.K., (poster).	お茶の水女子大学附属幼稚園で行っている対話によって進める新しい保育記録（対話型マップ記録）について、〇その実際〇教員たちのインタビューによって導き出した意義〇記録が教諭にとってもつ意味、をまとめた。記録を通して、子ども同士や子どもとモノやコトとの関係性を多面的に見ることができ、子どもの理解を促進しているとまとめられた。

作品

刑部育子，2022，「保育を記録するビデオツール CAVScene　開発史」，第7回 お茶の水女子大学 ライフ×アート展「記録展 ―子どもにふれる―」 2022.9.1-3，お茶の水女子大学　国際交流留学生プラザ2F多目的ホール，（展示）.	本発表はビデオツール　CAVScene　開発史をまとめたものである。CAVSceneは保育の映像記録上にリアルタイムでメモが書き込めるツールである。開発には、様々な段階があったが、初期は静止画での書き込みしかできなかったが、今では動画を記録しながら気づきを音声から文字に変換して書き込めるツールにまで成長していることを示した。
「夕方の保育」研究チーム，「夕方の保育についての探究」，第7回 お茶の水女子大学 ライフ×アート展「記録展 ―子どもにふれる―」 2022.9.1-3，お茶の水女子大学　国際交流留学生プラザ2F多目的ホール，（展示）.	お茶大こども園で夕方の保育を探究した冊子の原画を展覧会で出品した。原画でなければわからない、絵に残る筆跡など、記録を書くとはどのようなことなのかを筆跡から感じとることができる。展覧会期間中は、展示をめぐって保育の話をする来場者の姿が多々見られた。
刑部育子・植村朋弘・中野洋一，CAVScene2. iOSバージョン. 技術製品化（CAVScene2 iPad用ビデオツール）: 著作:お茶の水女子大学. 配布元: AppStore. 発売日: 2021年10月4日.	CAVSceneは保育の映像記録上にリアルタイムでメモが書き込めるツールである。2021年に新規で開発したCAVScene2は、最新のiPad上で活用できるアプリケーションとなっており、メモが音声でその場で文字変換されて記録されるツールになっている。

その他

小玉亮子，2021，「附属幼稚園と大学―研究・教育のパートナーとして―」，『幼児の教育』120(2)，pp. 20-25.	イギリスのロンドン大学とシェリンガム幼稚園に訪問しインタビューした結果をふまえて、大学と幼稚園が研究パートナーである事の意義を論じたもの。

開講科目

大学院人間文化創成科学研究科博士前期課程人間発達科学専攻保育・児童学コース

開講年度	科目名	受講院生	科目等履修生
2021年度前期	保育マネジメント論特論	4名	2名
2021年度後期	保育マネジメント論演習	4名	5名
2022年度前期	保育実践リーダーシップ論特論	9名	2名

V　プロジェクトメンバー一覧

メンバー

内海　緒香　（お茶の水女子大学人間発達教育科学研究所　特任准教授）
菊地　知子　（お茶の水女子大学いずみナーサリー　元主任保育士）　※2021年度のみ
刑部　育子　（お茶の水女子大学基幹研究院人間科学系　教授）
小玉　亮子　（お茶の水女子大学基幹研究院人間科学系　教授）
髙橋　陽子　（お茶の水女子大学附属幼稚園　副園長）
辻谷　真知子　（お茶の水女子大学基幹研究院人間科学系　助教）
中澤　智子　（お茶の水女子大学いずみナーサリー　主任保育士）
浜口　順子　（お茶の水女子大学基幹研究院人間科学系　教授）
松島　のり子　（お茶の水女子大学基幹研究院人間科学系　助教）
宮里　暁美　（お茶の水女子大学アカデミック・プロダクション　寄附講座教授）
山下　智子　（お茶の水女子大学こども園　施設長）

運営委員会サポート

2021年度
藤谷　未央　（お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科　博士後期課程）
2022年度
横山　愛　（お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科　博士後期課程）

※所属・職は2023年3月時点

編　集　後　記

保育における「マネジメント」に焦点を当てて探究している軌跡をまとめることができました。道はまだ半ばですが、大切にしたいポイントが見えてきたように思います。保育とは、人が育っていくプロセスに関わる取り組みを人と人が相互に影響しあいながら作り上げていく営みです。その「マネジメント」には固有の特色があるように思います。学び合いは、始まったばかりです。皆様との語り合いを期待します。どうぞよろしくお願いいたします。（M・A）

本ブックレットの編集に携わらせていただく過程は、刊行にむけての進行を「マネジメント」する奥深さを経験する機会となり、同時に、自らが「保育マネジメント」を学ぶ道のりにもなりました。しかしながら、自らの理解の点でも、「保育マネジメント」を追究するという点でも、まだまだ未知のことがたくさんあると思います。第一号を契機として、ぜひ対話の輪を広げていきたいと思っています。（M・N）

本学着任2年目で経験も知識も浅い中、編集と執筆の機会をいただいて多くのことを考え学ぶことができました。ありがとうございました。「マネジメント」は管理職の役割だけではなく、子どもと保育者との日々の生活に密着していて、また保護者や地域の人々の存在と深くつながっていることを改めて感じています。この冊子を一つのきっかけとして、様々な方からご意見をいただき学び続けることができれば幸いです。（T・M）

本ブックレットに掲載した写真はすべて承諾を得ています。
刊行に際しましては、能登印刷株式会社 CS東京本部の遠藤唯さまに大変お世話になりました。ここに記して感謝申し上げます。

お茶の水女子大学 保育マネジメント ブックレット vol.1
— 保育マネジメントの現状と展望 —

発　行　日　2023年3月1日
編　　集　国立大学法人お茶の水女子大学
保育マネジメント研究会
発　　行　お茶の水女子大学附属図書館（E-bookサービス）
〒112-8610　東京都文京区大塚2丁目1番1号
https://www.lib.ocha.ac.jp/
電話 03-5978-5835　FAX 03-5978-5849
印　　刷　能登印刷株式会社
〒920-0855　石川県金沢市武蔵町7番10号
ISBN978-4-904793-30-5

本著作の著作権は国立大学法人お茶の水女子大学保育マネジメント研究会が保持しています。
著作権法上の著作権の制限を超える利用については、お茶の水女子大学附属図書館にお問い合わせください。

ISBN978-4-904793-30-5